『頑張らない婚活-ストレス・フリーで運命の人と出会う！！-』

～「マイ・ハッピー・マップ」がすべてを変える！～

キャリアウーマンのアドベンチャー婚活、スーパー・サクセスストーリー

目次

第0章　**三週間で、運命の人と結婚？** 3
第1章　**頑張らない！「冷えとり」と「マイ・ハッピー・マップ」が婚活を変えるエラー! ブックマークが定義されていません。**
第1節　婚活アウトロー宣言 5
第2節　発想を変えて楽になる、あなたは全然、悪くない 9
第3節　自分のコアを決める　自然体で生きること 13
第4節　「マイ・ハッピー・マップ」を作る、もしもお金と時間があったなら 17
第5節　留学・バカンス・BRICS、後悔しない生き方 20
第2章　**結婚への近道、ストレスを除くと、あなたの運がぐんぐん育つ** 24
第1節　会社を辞めたら・・・みるみる運が向いてきた！ 24
第2節　思い切りバカンス、頭も心も空っぽにして！ 26
第3節　地図の読める女になる！カウンセラーに惑わされない！ 28
第4節　インド人のお告げ、直感を信じて 32
第3章　**理想のオット、ニガボンと運命の出会い、カーニバル in ブラジル** 39
第1節　マチュピチュ・ナスカ、南米沈没、すべての道はブラジルへ！ 39
第2節　発見、私の場所！サルバドールで「ニガボン」をゲット 41
第3節　ストレス・フリーの瞬間、熱狂の踊りとダサダサ君 45
第4節　えっ、この人が私の運命の人？ニガボンそれは「善良な黒人」 47
第5節　弱「気」な私、そばにあなたがいないから・・・ 53
第4章　**女が結婚を決める時、「マイ・ハッピー・マップ」でコア・チェックエラー! ブックマークが定義されていません。**
第1節　「笑い」と「人間としてのまっとうさ」、オットの条件**エラー! ブックマークが定義されていません。**
第2節　ペットか、野生の生き物か？あなたの好きな動物は？**エラー! ブックマークが定義されていません。**
第3節　生き物地球紀行、左脳ではなく右脳の声を聞こう**エラー! ブックマークが定義されていません。**
第4節　「将来のオット」と「マイ・ハッピー・マップ」の相性チェック**エラー! ブックマークが定義されていません。**
第5章　**念願の結婚！さあ、あなたも、あの鐘を鳴らそう！エラー! ブックマークが定義されていません。**
第1節　アドベンチャー女の受難、困難をのりきるために**エラー! ブックマークが定義されていません。**
第2節　二人の男と色つきの男、私が妻と呼ばれた日**エラー! ブックマークが定義されてい**

ません。

第3節　　がんばらなかった、だから運がひらけた、婚活成功のカギ**エラー! ブックマークが定義されていません。**

第4節　　ボブマーリィと奇跡の林檎、気にかけてくれる人がいる**エラー! ブックマークが定義されていません。**

第5節　　「マイ・ハッピー・マップ」をフル活用する**エラー! ブックマークが定義されていません。**

第6節　　最後をみとってくれる人　サルバドールの風**エラー! ブックマークが定義されていません。**

第0章　三週間で、運命の人と結婚？

「私のシュジンはブラジル人なんです」

人にこう話すと、みなさん、えぇっと驚きます。そしていろいろな質問が飛んできます。特に二十代から、四十代まで、独身の女性は、食いつきモードになって私に訊ねます。

「どこで知り合ったんですか？」

「ブラジルで・・・旅行していた時に出会ったの・・・」

「えぇー旅行中にですか？」

「・・・そう、カーニバルの時に知り合ったの・・・」

「それじゃ、ずいぶん長く旅行してたんですか？だってなかなか結婚までいかないですよねぇ？」

「いや、ブラジルにはー か月もいなかったかな？シュジンと出会って三週間で結婚を決めたのよ。」

「えぇー！！！三週間ですか？どうやったらそんなに短時間で決められるのですか？同じ仕事とか、何か共通点がいっぱいあったのですか？」

「そうね、共通点はいろいろあるけど・・・出会った時にはシュジンは学生だったのよ」

「えっ！年下ですか？」

「そう、十一歳年下、私と出会った時、シュジンは二十五だったの、昔は若かったけど、今は三十すぎてオッサンになってきちゃって・・・」

「ユキーナさん！どうやって知り合ったんですか？ぜひ結婚の話聞きたいです！！！」

・・・といつも、たくさんの女性から、このように、私の結婚体験記を聞かせてくださいと言われます。私はシュジンと会った状況を話します。

「カーニバルのイベント会場で、近くにいたのがシュジンだったの」

「えぇ、っていうことは、カーニバルで運命の出会いがあったんですか？ロマンチック！！」

とさらに驚かれます。そして彼女達は決まってこう付け加えます。

「私も本当に、婚活、頑張っていのるのですけど、なかなか、これっていう人に出会えなくて・・・」

こういうコメントを聞くと、私は思わずこう答えたくなります。

「頑張ったらダメだよ、婚活を頑張ると運命の人と出会えないよ！」

「・・・え、どういうことですか？どうして頑張っちゃいけないのですか？」

頑張ったらダメ、その教訓が予想外なのでしょう、驚きの表情を隠さずに彼女たちは私に聞き返すのです。「頑張ったら婚活はダメ」それは私の体験から出た格言です。私も三十代の前半は仕事のストレスと婚活のプレッシャーに耐えずさらされていました。その中で留学の準備もしていたので体調を崩し、病気になりました。そして「もう婚活はしない！」と「婚活アウトロー宣言」をしたのです。そして自分の人生をどう生きるか、自分がストレスを感じない、ストレス・フリーになるにはどうしたらいいのか、それを考えるようになったのです。

ストレスが少なくなると、運が向いてきました。いろいろなことがトントン拍子でいい方向に回っていったのです。私は念願の MBA 留学を果たしました。それもイタリアとアメリカ二箇所で体験することができました。そしてこれまた念願だった南米旅行、ブラジル放浪の旅をしました。私はダンスが大好きなのですが、踊りの祭典、カーニバルで、踊りながら運命の人をみつけたのです。そして見事ゴールインし、八年たった今も幸せに暮らしています。

このような婚活女性の質問に答えるため、本書では、私が結婚に至るまで、具体的に何をしたのか、それを順を追ってお話していきます。

一章では、つらい婚活生活に終止符をうち、「冷え取り」という健康方を通じて、私の内面の認識が変わっていったこと、そして「マイ・ハッピー・マップ」という、「自分の幸せ発見図」を作ったことをお話しします。この「マイ・ハッピー・マップ」の内容を実践したところ、私の運がみるみる向上していきました。二章では、これを具体的にお話します。そして三章と四章ではこの「マップ」の集大成として私がブラジルを放浪し、主人と出会い、結婚を決意する、その経緯をお話しします。四章では特に結婚の条件にフォーカスしてお話しします。五章では、念願かなってついに結婚式を挙げるまでのドラマを書きました。そしてそれまでの「私の婚活」を振りかえってみて、何が大切だったのか、婚活成功の鍵となる事をまとめてみました。五章の最後には、私が「結婚してよかった」と思えるエピソードも付け加えました。これを通じて、みなさんに結婚の意味を再確認していただければと思います。

多くの女性にとって、婚活は本当にしんどいものだと思います。ストレスとプレッシャーから解放されたい、と願ってる女性も多いと思います。多くの婚活本や相談所、カウンセラーは、「ストレスやプレッシャーに負けず頑張って、結婚したいなら一生懸命婚活して！」と言います。けれどもこうしたストレス、プレッシャーがある婚活は、結局うまくいかないのです。それよりもストレス・フリーを心がけましょう、それが、私が経験を通じて得た教訓です。

本書を読むことで、婚活を頑張っている皆さんが、ストレスとプレッシャーから解放されて、楽しみながら、パートナーを見つけられる、そんな楽しい婚活のお手伝いができればと思います。どうぞ、リラックスして、楽しみながらページを読み進めていってください。

今年はブラジルワールドカップの年です。何かと話題になるブラジルですが、実際に行くにはちょっと遠いところです。往復で四日間はかかりますから、おいそれと旅行できる場所ではないでしょう。本書を通じて、エキサイティングなブラジルの様子が手に取るように伝われば と思います。なかなか行けないブラジルですが、この本でブラジルの風と熱気を、少しでも感じていただければ幸いです。

それでは、このブラジル婚活記、どうぞエンジョイしてください！

第１章　婚活アウトロー宣言

第１項　お前のキャリアは必要、でも選り好みするな！

私は３２歳の時に、海外留学を決意して英語の勉強を始めました。大学を出てから大手コンサル会社に勤めて十年たったときのことです。女性ながらにきちんと勉強して資格も取りました。やはり男性社会で、男性と対等に肩を並べて働くには資格が不可欠だと思ったからです。それ以来、仕事のあらゆる場面で「女だから、できない」と思われないように必死に頑張ってきました。けれども、所詮、日本は男性社会、女性はどんなに頑張っても認められないのでは、と思いました。それならば、男女関係なく、きちんと能力が判断される世界に行きたい。そう思ったのが、海外留学を目指したきっかけです。

けれども同時に、両親や兄弟たちからは、もういい年なんだから、留学なんてしないで結婚したら、という声が浴びせられました。大学を出て三十過ぎ、総合職で働く、それだけで男性からは距離をおかれる。その上、留学なんてしたら、ますます縁遠くなる。お願いだから留学なんて考えないで、ここらで誰かいい人を見つけて結婚してくれ、と言うのです。アラサ―の頃からこのようなプレッシャーはじわじわとかけられていたのですが、私が三十を超してから一層はげしくなり、ユキーナが留学しようとしている、とわかった時点で、ほとんど毎日のように電話やメールなどで、諭されるようになりました。

だけど、私には一つの大きな疑問がありました。我が家は地元でずっと商売をやっていたのですが、私が小学生の時、父が詐欺にあい、その商売を辞めざるを得ませんでした。その後もバブルの影響でたびたび地上げにあったり、なけなしの不動産をだまし取られそうになったりしたのです。私の仕事は不動産コンサル、それも資格を持ったプロですから、さまざまな場面で両親を助けました。何も恩に着せるわけではないのですが、不動産屋のオヤジ達の矢面にたって、交渉してきたのは私なのです。私の知識とその後のキャリアで、素人だとだまされてしまうような場面でも、しっかり私たちの権利を守ってきたのです。両親、兄弟は間接的に、私の現在ある地位、私の専門家としてのスキルで、何らかのメリットを得ているのです。

それにもかかわらず、三十過ぎた娘が嫁にもいかない、という理由で、私のキャリアにケチをつけているのです。最初は私もさほど気に止めませんでした。けれども毎日かかってくる電話は、あるときは、地上げ対策相談、そして別の時には、お見合いの強制的な勧めなのです。朝の電話では、「お前のキャリアが必要だ」といい、夕方の電話では「高学歴の女は売れ残るから、選り好みしないで！」と言われます。私の内心の葛藤たるや相当なものです。この日々つのっていく、腑に落ちない疑問に、私の心身がかなり、参ってきたのでしょう。さらに仕事をしながら、留学のための勉強で体と心に相当無理をかけたのだと思います。私は甲状腺の病気

を患い、おまけに不眠症のため心療内科に通うようになりました。

第2項　勝ち犬達の「威嚇吠え」、アイ・アム・ザ・ロー”I am the law!!-私が法律-”

さらに、私がもっと、「腑に落ちない」という感覚をもったのは、姉たちの態度でした。二人の姉はともに二十代で結婚し、それぞれ二人ずつ子供がいます。結婚に関する勝ち組、負け組で言えば、当然、勝ち組です。もちろん子供たちはまだ小さいので手がかかります。それはわかるのですが、家のことを相談する、という時はきまって、「私は子供が小さいからとてもじゃないけどできない！」と拒否してくるのです。もちろん、それは仕方がないのですが、回を重ねるごとに、拒否して当たり前、という態度が強くなりました。そして、時間もお金も十分にあって、何でも自分の好きにできる、「独身貴族」のお前が、家のごたごたを処理するのが当たり前、という感情を表すようになってきたのです。

私達は、子供を育てている、だから他のことは一切できない。これ以外の雑事は、独身貴族である、お前がやって当たり前だろう、そんな態度を、私は度々肌で感じるようになりました。もちろん相手は相手でいろいろ言い分があるでしょう。けれども、子供を育てている自分たちが、日本中でもっとも崇高な仕事をしている、それ以外のこと、時間とお金を自分のため「だけ」に使っている奴らは、くだらないことをしている。そういう人間は、崇高な仕事をしている私たちを助けて当たり前、という意識がみてとれたのです。おそらく私の被害妄想かもしれません。けれども、このような勝犬の意識は、「私が一番偉いの、私が法律、だから私のいうことをきくのはあたりまえなのよ！！」という勝利の宣言のようにも聞こえました。

その一方で、姉は
「見合いの返事はちゃんとしてね、せっかく相手が、こっちを気の毒に思ってやってくれているのだから」と言います。
私が返事をすべき相手は、姉のダンナの母親、つまり姉の姑に当たる人です。世話好きな人なので、いろいろと見合いの話をもってきてくれるのです。こちらを気の毒に思って、というのは、三十過ぎでも、まだ相手がみつけられず、仕事ばかりしている可愛そうな妹、という意味でしょうか。「その可愛そうな妹のために、ウチの姑がこれだけ気を使っているのだから、失礼な態度はとるな！」こういうメッセージを私は何度も受け取りました。その度に、方や私のキャリアをあてにし、その一方でキャリアがあって可愛そう、と私のキャリアをなじる、その姉の心情が理解できなくなっていきました。とても穿った（うがった）見方だと思いますが、この人は姑の機嫌だけを気にしていて、私のことは別にどうでもいいと思っているのではないか、そんな疑心暗鬼の気持ちも起こってきたのです。

第3項　「私、人生、捨ててる！」と思った瞬間

そんな中、ことわり切れずに、すすめられた見合いをしました。相手は百八十センチある大柄な人で、早稲田大学をでて、民間の一流企業に勤めていました。だからと言って人間的に魅力があるとは限りません。会社で良く見かける、不満だらけの顔つきをしていまいた。会話ももりあがりません。私が何よりもイヤだと思ったのは、相手の目をキチンと見ないで、終始うつむいて話していることでした。ちらちらと時々上目づかいでみられる度に、なんだか自分の持ち物をスリに狙われているような、たまらない不快感を覚えました。見合いの時間は苦痛でした。けれども姉の姑からの紹介です。私は、「これは仕事だ！」と思いました。相手は仕事の取引先だ！と思い、笑顔を作って、なんとかつながる話題を振っていったのです。

会話の間中、顔では笑っていましたが、心の中は、トホホな思いでした。もしもこの人と結婚することになったら、私、家庭でもこんな営業をしなければいけないのだろうか？と不安がよぎりました。何よりも、相手をまっすぐ見て話すこと、そんなことすらできない相手と、パートナーとして信頼関係が築ける訳がありません。この人と結婚したら、「私、自分の人生をすててるかも！！」と真剣に考えました。見合いは、もちろん私の方から、「趣味があわないようです、申し訳ありません」とお断りしました。怒ったのは姉です。

「長身、早稲田出身、超一流企業、そんな相手で申し分ないじゃない、何が嫌なの、こんな相手が残っているなんて、滅多にないのだから、これを断ったら、もうこれ以上の話は来ないよ、いい、わかって頂戴！」

とすごい剣幕でまくしたてました。

この姉の怒りは、私にはとてもショックでした。いままで一生懸命勉強して、キャリアを築いたことの何がいけないというのでしょう。そして実際に姉たちはその恩恵も多少ながらうけているのです。私は相手の学歴や勤め先がどうのと言っているのではありません。人間として、信頼関係は築けないだろう、それが一目見てわかったので、やんわりとお断りしただけのことです。けれども姉の私に対する見方は、負け犬の選り好み、「わがまま」なのです。もしその早稲田の人と結婚したら、私は自分の人生を捨てなければならないのです。正直、私にとってこれほどの屈辱はありませんでした。

第4項　婚活アウトロー宣言

数日後、さらに不快なことが起こりました。私の携帯に、関西弁で電話がかかってきました。とって話を聞くと、どうやら姉の姑のお友達のようです。私はあまりに「わがまま」なので、どうやら、すご腕の「お見合い世話焼きおばさん」に助けを求めたようなのです。

「御嬢さん、お譲さんにご紹介したい方がいてはります、〇〇大学ではって、〇〇研究所勤務、そんで、この方なぁ、ご自宅、買って持ってますねん。財産が有りますさかい、条件にぴっ

たりやと思いますけど、会われます？」

「・・・はぁ、・・・財産って一体なんの話ですか？」

「おたくのお母さんがなぁ、かならず財産もってる人にしてくれ、言いはって・・・違いますやろか？」

何の話だろう？一瞬私の頭は混乱しました。とにかくここは母に電話で確かめるしかありません。私はこの「すご腕お見合いおばさん」の電話を早々に切って、母に電話をかけました。母はそんなことは知らない、とシラを切ります、そして、せっかくだから相手に会ってみては？というのです。どうも何かおかしいのです。私に何か隠しているような雰囲気です。私は二番目の姉に電話をかけて問いただしました。お見合いおばさんと縁戚関係があるのは、一番上の姉です。二番目の姉なら、お見合いおばさんとのしがらみもなく、事実を語ってくれるはずです。

姉に電話をして事実がわかりました。母の心配というのは、やはり私のキャリアに関することです。ユキーナは総合職として働いている、男性のように出世はできないだろうが、ふつうの女性よりは稼ぐだろう、そうしたら、財産目当ての男がよってくる。そんな相手に引っかかってだまされるかもしれない。自分で財産を築いている男なら、まずその心配はないだろう。だから何はなくとも財産を持っている男、これを紹介してくれるように、「すご腕世話焼きおばさん」に頼んだ。これが、姉が私に語ってくれた事実でした。

これを聞いたとき、私は心底、自分が情けなくなりました。母は私に対して、何も信頼していないのです。私がキャリアを築いたことも、その専門性で我が家にふりかかる問題を解決していることも、そして、私の人を見る目、パートナーを探す能力、これすらも、何も信頼していないのです。このバカ娘は、出世もできないくせに、出世できると思って働いている、そしてコツコツ貯めた貯金を財産目当ての男にだまし取られるのがオチだ、なんと母は実の娘に、こんな印象をいだいていたのです。実の親だから、心配するのは当たり前、そう思われるかもしれません。その通りだと思います。けれども仕事に関しても、結婚に関しても、ネガティブな面しか想像していないのです。そしてそのネガティブな出来事がかならず起こる、として先手を打とうとしているのです。実の母のことをあまり悪くいいたくはありませんが、この母の妄想こそが、私が断ち切らなければいけないものだ、私は直感的にそう思いました。

家族が私のことを思ってくれる、それは有難いことです。けれども過度な心配や、被害妄想、そして私の幸せにならない、単なる親切の押し付けは断固排除すべき！私はそう決意したのです。

もう誰のアドバイスも聞くものか、私は私、自分のやりたいように生きたい、私の人生は、自分の選択で歩ませてくれ！と思いました。姉から「迷惑をかけて！」と怒られようとも関係ない。「後生だから私の思いを察してくれ」と母に頼まれても無視する。人に振り回されるのはまっぴ

らだ！私はこう開き直りました。誰の世話にもならない、だれの指図も受けない、私は私のやりたいようにやる、それで生涯独身だったとしても、「人生を捨てる」よりははるかにマシ！！私はこう決意しました。

婚活にはいろいろなタイプがあると思います。相談所に行き、合コンにでて、婚活サイトを頻繁にチェックして、みんな莫大な時間とお金とエネルギーを注いであらゆる手段をためしています。仮にこういう人たちを、婚活優等生と言うならば、私の態度は婚活「落ちこぼれ」です。相談所も登録しない、見合いも合コンもしない、人の助けは何も借りない、と言うのですから、本当に結婚する気あるの？と聞かれてもおかしくない態度です。一種の婚活アウトローです。

けれども、親兄弟からの言われない差別に耐え、欠陥人間のレッテルを貼られ、「自分で自分の人生を捨てた！」と思うよりははるかにマシです。このまま生涯独身で、だれにもみとられずに寂しい老後を送ったとしても、私の人格は健全なままです。人がどう思おうと、自分で自分を捨てたらアカン、私はそう決意して、姉たち、両親に、婚活中止の宣言をしました。もう二度と見合いの話も何も持ってこないでほしい。私は自分の葬式代だけは残して死ぬようにする。誰にも迷惑はかけない、だから放っておいてほしい。そう言って私は、留学のための受験勉強に専念し始めたのです。

第１節　　発想を変えて楽になる、あなたは全然、悪くない

第１項　私は本当にワガママだったのか？

今から思うとこの婚活アウトロー宣言はとてもいいことでした。なぜなら、その時の自分の状況を客観的に見ることができたからです。それまでは、婚活のプレッシャーがあり、周りの状況も自分のおかれていた状況も冷静になって考える、ということができませんでした。

冷静になって考えてみるといろいろな「事実」が見えてきました。

まず需要と供給の関係を分析することができました。需要と供給というと難しい経済用語のように聞こえますが、結婚についての「需要と供給」ということです。男性に対して、どれだけの女性がいるのか、女性の理想に対して、それに見合う男性がどれだけいるのか、ということです。

世間でも指摘されているように、現代は、女性の高学歴化が進んでいます。たくさんの女性が大学にいくような時代です。私たちの母親の世代では考えられなかったことです。昔は、女

性は大学には行かない、男だけが大学に行って学問をつければいい、そういう時代だったのです。その時代では、ほとんどの女性にとって、多くの男性が自分よりも高学歴だったのです。

けれども今は違います。猫も杓子も大学に行きます。そうなると、娘を持つ家庭でも、娘だから高卒でいい、という考えはなくなります。やれ今は高学歴化だから、といって、娘を大学に行かせるようになります。大学卒、それ以上の学歴の女性はとても多いのです。この事実を頭にいれて、女性が男性に求める結婚の条件を考えてみます。多くの女性は「男性の学歴は女性よりも高くなければいけない」という条件をもつはずです。これは今では、世間の常識とも言えるでしょう。

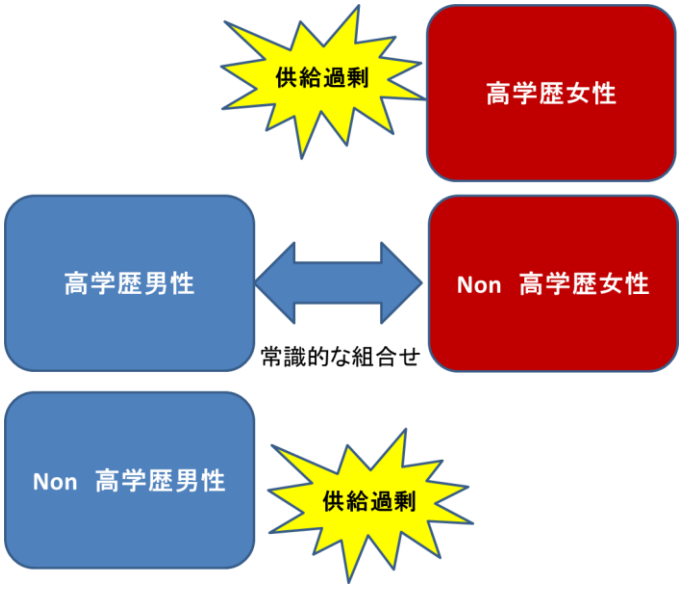
第２項　そうか、需要と供給だった！

本来ならば、女性が男性と同等の学歴をもとめて、同じようなキャリアを求めるならば、結婚に関する考え方も、男女平等であっていいはずです。相手の学歴の良しあしは関係ない、相手の所得の良しあしは関係ない、というふうに、人々の意識もかわっていかなければいけないのでしょう。けれども日本の社会では、人々の常識は、そうおいそれとは変わらないのです。だれが好き好んで高卒の男なんかと！だれがあんな偏差値の低い大学の男なんかと！という認識が女性の側にあるのです。また男性の側でも、昔の認識をひきずっているのです。自分よりも高学歴の女なんかと結婚するものか！！女は学問なんかしなくていい！！そんな認識があれば、高学歴の女性はまず結婚相手として求められないのです。

そうすると日本の社会の中で矛盾が起こってきます。女性は高学歴をめざすべき、けれども自分の学歴以上の男性と結婚すること、という新しい常識ができます。いうまでもなくこの新しい常識では、需給のバランスがとれていないのです。

もう少し具体的に説明しましょう。仮に、男性、女性ともに、人口の半分が大学に行くとします。男性は自分よりも低い学歴の女性を求めます。すると相手にされるのは、50パーセントの女性です。一方の大学を出た女性ですが、自分よりも高い学歴を求めます。大学を出た50パーセントの男性はすでに、低い学歴の女性とくっついています。のこりの男性は自分より学歴が下ですから、高学歴の女性は見向きもしないでしょう。すると高学歴の女性と、学歴の低い男性、この二つのグループが余っていくのです。こうした需給のアンバランスが起こっている、それが現代社会なのです。

今、日本ではたくさんの女性が婚活に励んでいます。日々、屈辱とプレッシャーにさらされて頑張っています。その多くの女性たちの悩みは、「いいと思う男性には、必ず相手がいて、自分に合う男性をなかなか見つけられない」ということです。



私は、頭の中でこの図を考えつきました。こう整理すれば明らかです。何が明らかなのかというと、私が結婚難民となり、みんなからワガママと呼ばれている理由です。すべては需給関係なのです。そして、こと学歴に関して言えば、社会で奨励されるのは、高学歴です。それを目指して何が悪いのでしょう。学問をつけてキャリアを積むこと、それのどこがワガママなのでしょう。高学歴女性が、結婚の相手がいない、というのは、社会の現象、社会問題なのです。個人のせいにするべき問題ではなく、社会が悪いのです。

私は全く悪くありません。悪いのはすべて社会です、そしてその社会をぜんぜん理解していない人たちです。親、兄弟、友人、彼らにはこの仕組みが理解できないのです。そして現実の社会現象が自分に都合が悪から、自分の「常識」とずれているから、そう言って個人のせいにしているのです。なんというひどい状況でしょうか！

第3項　婚活の基本：百パーセント自己肯定「あなたは全然悪くない！」

この事実に気付いた私は、自分を責めることを止めました。前述の例は、あくまでも「学歴」について考えてみたわけですが、これは「所得」でも「ルックス」でも同じことなのです。男性が自分よりも下を求め、女性が自分よりも上を求めている限り、需要のバランスは永遠に回復しません。

そのアンバランスのはざまにあって、悩む必要は全くないのです。私はまず、私は全然悪くない、これを繰り返し自分の中にインプットするようにしました。

婚活に「頑張る」多くの女性は、劣等感に苛まれています。そして周りからさんざんプレッシャーをかけられ、「わがまま」呼ばわりされています。意識しないように努めても、こうした周囲からのプレッシャーは知らず知らずに人の心を固くします。

そうなると自分の魅力も発揮できなくなるのです。どれほど魅力にあふれて輝いている人でも、「あなたはダメ」と言われ、そういう言葉やプレッシャーを毎日浴びせられてばかりいると、自然と委縮してきます。そして「本当に自分はダメかも・・・」と自信をうしなってしまうのです。頑張れば頑張るほど、この状況は深刻になります。

私の婚活を振り返って、本当に必要なのは、ここだったのでは？と思います。それは、完全な自己肯定です、「私は悪くない」と理解することです。そしてここで頑張らないようにしよう、と思いました。この状況を打開するように、よし、婚活を頑張ろう！としないで、私は悪くない、私は正しい、私は素敵！と自己肯定をとことん行いました。それがその後の自分の婚活成功を導いたのだと思います。

婚活で「頑張る」ということは、前に示したアンバランスの図と向き合うことです。もともとバランスしていないのです。あなた一人のちからで、バランスをもとに戻すことはできません。それでもなお、無理やりバランスさせようとすれば、どこかにひずみが生じます。もう、あまっているからいいや、と考えて供給過剰になっている「non　高学歴」を選んだとしたら、それはあなたのこころに「ゆがみ」が生じます。そして何よりも、「もう相手がいないから、あんたでもいいわ、しょうがないから結婚してあげるわ」というのでは、相手の男性もたまったものではありません。こんな結婚は最初から上手くいかないでしょう。

アンバランスとは無理に闘おうとしないことです。もともと社会現象であなたのせいではないのですから、ここを攻略しようとしてはいけません。では、どうすればいいのでしょうか？

第４項　「どこでもドア」と「タイムマシン」 -　どらえもんの力を借りる-

私は「市場分析」ということを二十年近くやっています。需給があわなくなったら、どうするか、それをこれまで培ったテクニックから考えてみます。自分が求めるものがない、その状況から抜け出すには、発想を自由にすることです。まず本当にないのか、を考えてみます。いくら市場には、ない、ない、と言われても、発想を変えてみると、ないものが見つかるようになります。

発想を変えるとは、エリアを広げること、と時間の幅をひろげることです。東京だけにこだわらず、地方もみてみればいいのです。地方がだめなら、海外も視野にいれてもいいのです。ま

るでドラえもんの「どこでもドア」であちこちに出かけていくように、エリアをひろげていけば、解決の糸口が見つかるかもしれないのです。

また時間軸でとらえる、これも重要です。結婚の供給、その時間軸って何？とおもわれるかもしれません。それは相手の年齢です。「適齢期」の男性の数が極端に限られるのです。相手の年齢を下、あるいは上にもっていけば、需給がバランスする部分もあるでしょう。これもドラえもんの力をかりましょう。そうです、「タイムマシン」に乗って、相手の年代を変えてみてみればいいのです。

年下なんて、絶対無理！と思っている方でも、ちょっと視点を変えて相手を見てみてはいかがでしょうか？あとから説明しますが、自分の「マイ・ハッピー・マップ」を作ってみると、自分が理想の結婚相手に対して求めていた年齢のレンジは意外に広かったのかも？と思えるかもしれません。

ここで重要なのは、自由な発想で現状を捉えるということ、そして自分を百パーセント受け入れて、肯定することです。

第2節　　自分のコアを決める　自然体で生きること

第1項　冷えとりとの出会い

当時の私は、甲状腺の病気があり、心療内科と病院を掛け持ちし、たくさんの薬を飲んでいました。けれども、おそらく自分の心の中の本心がそれに拒否反応を示していたのでしょう、こうした薬漬けの医療は絶対に何かがおかしいと思っていました。これは何か間違っている、もっと自然な方法で病気は治療できるのではないかと思いました。そんな時に、気功療法と「冷えとり」に出会いまいした。

この気功ではもちろん薬はつかいません。手術もしません。天然素材の絹と綿の靴下をはき、半身浴をするという「冷えとり」をおこなっていくのです。人間の体は上半身と下半身との間に温度差があり、いつも下半身は冷えている状態なのです。下半身を温めて、内臓の血液などの気の巡りを良くし、体のあらゆる部分がきちんと働けるようにするのです。きちんと働けるように、とは、各臓器に、これまでため込まれた毒を出しやすくし、老廃物を無くして、臓器が本来持つ力を回復させるのです。これによって病気は自然と治っていきます。

私も最初は半信半疑でした。けれども気功の先生はまっすぐに私を見て、こうした冷えとりを説明してくれたのです。かつての見合い相手とは違って、きちんと相手の目を見て誠実に話

してくれたのです。私は、こうした先生の真摯な態度に好感をもったので、この先生の言うことは信じてみよう、そう思って「冷えとり」を実践しました。

第2項　みるみる出てくる体の毒、心の毒

「人によって違いますが、いろいろな形で、毒が出てきますよ」

最初の施術の後に先生が私にこう言いました。靴下と半身浴で体の冷えが取れてくると、臓器の毒だし機能が高まって体の表面に何らかの症状がでる、というのです。私の場合は、手指の先に水泡ができました。かゆいので掻くと破れて水が出てきます、傷は乾いて「かさぶた」になり、同じ場所にまた水泡ができます。かいて水をだし「かさぶた」になり、これを何度か繰り返すと水泡は出てこなくなります。

気功の先生に話すと、もっとひどい毒出しもあります、と言われました。アトピーも一つの毒出しです。ニキビやあばたが出る人もいれば、子宮筋腫のような塊の経血がドッと出る人もいるそうです。さらに、私の興味を引いたのは、この先生が言った「心の毒」という表現でした。だれでも仕事や家族、家庭など人間関係で多くのストレスにさらされます。そのストレスが心の毒になって体にため込まれ、さらには、体の中の特定の臓器を悪くしていく、というのです。表現としては、ある特定の臓器が、心が感じたストレスを肩代わりして、ある症状として毒をすこしずつ出してくれている、そういう表現の方が適切かもしれません。先生曰く、「心の毒は、体の毒の五千倍」なのだそうです。ですから、引っ越しをしただけで子宮筋腫が無くなってしまったり、職場を変えただけで神経性の下痢が無くなったりするのです。

このように心と体は、密接に関連しているのです。心がピンチを感じると、体の臓器が悪くなり、そこから症状という形で、心が感じた毒を無意識のうちに出してくれるのです。この話はすんなりと私の腑に落ちて、納得がいきました。私の甲状腺の病気も、不眠症も、私の心が受けた、たくさんの毒の一部の肩代わりだったのです。あまりにも大きい心の毒を、一部肩代わりして、これらの臓器が出してくれていたのです。それならば、心の毒をとりのぞくのが、一番先なのではないか、と私は思いました。こうした病の根本解決は、心の毒、つまりストレスをとることではないだろうか、と思ったのです。

私のこころが強く感じていたストレスはいうまでもありません、周囲の婚活のプレッシャーです。理不尽な仕事をさせられること、そのストレスもありました。こうしたストレスを無くすには、そのストレスの元を絶たなければいけない・・・私はこう考えました。そしてどうすればストレスを減らすことができるのか、それを絶えず考えるようになったのです。

第3項　食べ物の変化、自然の恵みに触れる

皮膚の変化とともに、食べ物の好みも変わってきます。冷えとりをすると、いわゆる体を冷やす食べ物には敏感に反応して、それほど食べたくなくなるのです。私は冷えとりを始めてから一週間くらいでコーヒーを飲まなくなりました。かつてはイタリアにかぶれ、朝はかならずイタリア式のカフェラテを飲んでいたのですが、コーヒーを一口飲んで「うわ、にがっ！」と思わず吐き出すようになりました。小学生くらいのとき、大人の真似をして飲んだコーヒー、あの苦さが口の中によみがえってきたのです。こうして冷えとりを初めて数か月の間に、コーヒーだけでなく、チーズなどの乳製品、なま魚、加工肉などは食べなくなりました。代わりに、野菜や豆腐などをおいしく感じるようになりました。今、私は、冷えとりを実践して約十年になりますが、この間で食べ物の好みはほぼ百八十度かわりました。

今は、自然栽培の食材を買って食べています。これは、農薬も使わず、肥料もつかわず、土を浄化することから初めて、そこから土自体の自然の力で農作物を作るというものです。この自然栽培の食材を食べて、もう7年ほどになります。私が健康に気を付けている、ということではありません。単純に、自然栽培の食材がおいしいのです。お米も、野菜も、炊いただけ、茹でただけで感動するほどおいしいのです。私の毎日の弁当は、茹でたニンジンや、じゃがいもを皮付きのまま蒸しただけ、というのがあります。手間暇かけずにシンプルに調理する、それだけで十分においしいので、見た目は悪いのですが、こうした超簡単弁当を持って行っているのです。

第4項　自分のコア、自然ということに目覚める

この「自然」という考えは、その後の私の人生に、大きな影響を及ぼしました。冷えとりをすると、体にわるい、不自然なものは、毒素としてすぐに体から排出するようになったのです。大量の化学物質や食品添加物、いわゆる体に悪いとされながらも、食品に多量に含まれている物には、敏感に反応するようになっていきました。頭痛、鼻水、せき、くしゃみ、下痢など症状はさまざまですが、体に入った毒は、翌日にはかならず何らかの症状になって、体の外に排出されます。不思議なのですが、添加物が入っていても、ほかの人が心を込めて作ってくれたものは、それほどひどい毒だしにはなりません。やはり、食べ物は気なのだなぁと思うことがあります。クリスチャンの方で、人を癒し感動させるおにぎりを作る女性がいるそうです。この方の「おにぎり」にもやはり気、まごころがこもっているからなのだと思います。

自然の食べ物に触れていると、不自然ということが本当に理解できるようになります。私の独断になりますが、不自然が国じゅうにあふれているのは、アメリカです。日本は戦後アメリカの影響を大きく受けて、社会制度、食文化を発達させましたので、いまだに日本のあらゆる食

材が不自然なものになっています。私は、その後アメリカで数か月暮らすことになりますが、この半年にも満たない期間で十キロ太りました。おそらくアメリカの食が、過剰な添加物、化学物質、防腐剤やホルモン剤などで汚染されているからだと思います。アメリカにいた時は、この不自然な食のおかげで、私の心身は相当疲れていたのだと思います。

こうした冷えとりと、自然食スタイルは私のその後の人生を大きく変えました。というと大げさかもしれませんが、この考え方が、私の人生の拠り所を見つけるヒントになったのです。冷えとりと自然食から、私は「自然に生きる」を自分のモットーにしようと思いました。どのようなキャリアを積んで、どれだけ成功しても、心身共に健康で、幸せであるのが一番です。それには「自然に従って生きる、自然に生きる」これ以外には無いのではないかと思いました。不自然を避けて、自分の心と体をケアしていこう、これを自分のコア、中心にしよう、私はそう決意したのです。

第５項　　化けて出ない生き方

この気功のセラピーを受けて悟ったことは、病気というものは、自然治癒力で直すのだということです。西洋医学は投薬をしますが、結局は人間の自然治癒力の働きを助けるために何かを投与するのです。この事実を理解すると、健康でいるための最高の秘訣がわかってきます。健康でいる、それは、つまるところ、自分という人間の自然治癒力を最大限に発揮することなのです。臓器にたまった毒を軽くし、臓器の負担をすくなくすれば、体に入ってくる毒をいつでも出せるようになります。人間の自然治癒力が自然に働くようになるのです。

ちょっと観念的な話になりますが、自然治癒力は「気」とも表現できます。自然界に存在する病気を治すためのエネルギー、それは「気」なのです。そのエネルギー、気が病まないようにすることが健康でいる秘訣なのです。気の元を養って、いつでも自然治癒力が発揮できるようにしておくと、人間の能力が最大限に生かされます。この状態こそが、元気で、人が生き生きとしていられる状態だと表現できるでしょう。

人間の潜在能力は無限大、などと言われます。脳にしても、実際の生活で使っている割合は、潜在的に使うことができる割合の何分の一かであると、何かの本で読んだことがあります。人間が本来生まれて持っている能力を十分に生かすには、気の巡りをよくすることです。自分の体を自分でケアできるように、自然治癒力がちゃんと働くようにしておくことです。そうすれば、いつでも百パーセントの力を発揮することができます。私はこのように、「気」の状態がととのっていて、自然治癒力がちゃんと働ける状態を、「生けている」状態と定義しています。

どんな人でも死から逃れられません。人は必ず死ぬのです。そうであるなら、限りある人生

は最高の状態で満たされているようにしたい、私はそう思います。自然の力を取りいれて、自分の気を養って、心身ともに冷えがなくなって、常に最高の状態が保てる、この状態が理想です。この理想の状態でくらせたら、「活けてる人生」を送っているということになるでしょう。

ある時、気功の先生が私にこう言いました。

「この生活（気功を人に施すという生活）をつづけていれば、まぁ化けて出ることはないかなぁと・・」

私には一瞬意味がわかりませんでした。ぽかんと口をあけている私に先生が続けます。

「仮に今、死んだとしても、死んでも死にきれなくて、化けてでる・・とかね、そんなことにはならないでしょうねぇ・・」

これはとても意味の深い言葉でした。そして私は自分のサラリーマン生活を考えました。私も含め、多くの人が毎日毎日、遅くまで働いています。多くのストレスとプレッシャーを感じている人も多いのです。けれども、それに見合う報酬をもらっているかは疑問です。日本の社会は所得がある程度均一化されています。みんな、仕事の内容と報酬に不満を感じているのです。

もしも、金銭的に満たされたとしたら、幸せになれるのでしょうか？その先の物欲に悩まされるのではないでしょうか？もっと給料がほしい、役職が欲しい、名誉がほしい、と人の欲望はエスカレートしていくのです。こうした目的をいつももっているかぎり、幸せに生涯をおえられないでしょう。これらの欲望を求めていたら、望みは尽きないのです。今死んだら、自分は志（こころざし）半ばにして死んでしまった、と悔やんでも悔やみきれない思いが残るでしょう。恨みつらみがこの世に残って、結果的には、化けてでるようになるかもしれません。こんな風に化けてでるような人生、そんな生活を送っている人が多いのではないでしょうか？

ああ、そうだよなぁ、今、地震や事故で死んだとしても、化けて出るか出ないか、そこだよな、と私は思いました。そして、自分が生きていくには、化けて出ない生き方をしようと思いました。今死んでも後悔はない、ああ、自分が毎日生き生きしていて、「イケている人生」だったと幸せを胸に抱いて天国にいける、そんな人生にしたいなあと思ったのです。

毎日イケている人生にすること、それには、どうすればいいか、私はもう一度考えてみました。こころと体、これをベストな状態に保ちたい、ストレスを無くしたい、自然に従っていきたい、こういう思いが次から次へと沸きおこってきました。そして私はこうして沸き起こった考え、自分の思いつきを一度整理してみようと思ったのです。

第３節　「マイ・ハッピー・マップ」を作る、もしもお金と時間があったなら

第１項　コアを中心に、化けてでないためにあなたがすること

たとえ今、死んでも後悔しない、化けて出ない生き方をするために、私はどうしたらいいのだろう、日々そんなことを考えていたのですが、あるときふと、すべてを紙の上に書いて、ビジュアルに整理してみたらどうだろうかと思いつきました。

そして模造紙を一枚買ってきて、自宅のダイニングテーブルの上に広げて置きました。

中心に、まず自分のコアとなることを書いていきました。自分は何を中心にして生きるのか、これだけは、何があってもひけない、譲れない、とても大事なこと、それは何かを紙の中心に表現したのです。

冷えとりから、自然食を通じて、私の意識は大きく変わりました。ですから、私はその紙の中心に、「コア：自然に従って生きること」と書きました。これは自分の信条と言ってもいいでしょう。ここはみなさん、じっくり考えて書いてみましょう。数週間、数か月考えてもいいです。あるいは今直感で、ひらめいたことを考えてもいいです。人間いろんなことを言ってもやっぱりお金だよなあ、と思う人は「コア：お金があること」と書いてもいいです。これは誰に見せるわけでもありません、だから本音を語りましょう。自分自身に対しては本心をすべてさらけ出してください。

もし、考えてもコアがわからない、そういう場合はコアのところをあけておいてかまいません。そして次項で説明する、「これができなければ化けて出る」アイテムを書いていきましょう。あるいはストレス・フリーのアイテムを並べていってもかまわないのです。コアは後から気付くこともあります。また自分のやりたいことや大好きなこと、これを並べていくうちに、そうか自分のコア、中心は、こういうことなのでは？とだんだんと判ってくることもあります。

第２項　「これをしなかったら後悔する」をマッピング

そして次は、私自身がやっておきたいことをその周辺にならべて書いていきました。今ここで死んだとしたら、後悔がのこるだろうな、自分がやりたい内容、何としても達成したいことを書いていきました。

まず、コアの近くに大きく、「バカンスをしてのんびり過ごす」と書きました。
１０年以上前に、初めてイタリアを訪れてから、それ以来ずっとこのバカンスに憧れていました。イタリアでは数週間、何もしないでのんびり過ごすのです。海や山の景色のいいところで自分の心を空っぽにするのが、バカンスです。日本で仕事をしていたら、そんな贅沢はできませ

ん。でも生涯一度はバカンスをしてみたい、そういう気持ちで、「バカンスを・・・」と書きました。そしてついでに自分が行きたい場所もきちんと書きました。イタリアのシチリア島沖にうかぶ、サリーナ島です。私の大好きな映画「イル・ポスティーノ」の撮影の舞台になったところです。一度でいいからここに行きたいと思っていました。そこに行けずに人生をおえたら、おそらく化けで出るかも・・・そう思うと自然とペンが動きました。そしてイタリアの地図とサリーナ島の写真もその近くに張り付けてみました。

そして、他にやりたいこと、行きたい場所、挑戦したいこと、を次々に書き込んでいきました。

第３項　ストレス・フリーになるために

自然に従って生きる、これが私のコアです。そしてこのコアをいつもキープするには心身の健康が必要です。気が大切なのです。気、エネルギーは自然の恵みをとって、心の毒をためないことです。ここでは私は特に心の毒に注目しました。どうすれば心の毒がなくなるかと、考えました。こころの毒、とはストレスのことです。ではどうすればストレスを無くすことができるのでしょうか？

その時に、自分の頭にひらめいたのは、「自分の好きなことをする」ということでした。会社で嫌なことがあっても自分が本当に好きなことができればストレスが発散できます。心身を止むことが少なくなります。私はまず「ダンス」と書きました。小学校の頃から浴衣をきて「盆踊り」に行ったり、バレエの真似事をしたり、ベリーダンスを習ってみたりと、踊りは好きだなぁとおもいました。今までやって楽しかった踊り、この先、試してみたい踊りなど書きこみました。これらの好きなことは、前述のやりたいこと、と区別するため、「コア」の下側に書いていきました。

第４項　時間、お金、能力、すべてを手にしたら

こうして私は、「自分がやりたいこと」、楽しいことを考えて白い紙におとしていきました。かいているだけで自分の幸せな姿が想像できて、とても楽しくなりました。この紙には、自分の本当にやりたい希望と、自分が大好きなこと、がちりばめられています。自分のコアを中心にやりたいことがその周辺にちらばっているのです。まるで地図の上に、現在地を中心として目的地をポンポンと落としていくようなものです。ですからこれは、「マイ・ハッピー・マップ」とでも言えるでしょう。

これは私がこの先、幸せな結婚をするうえで、とても役に立ちました。なぜなら、しっかり自分と向き合って対話し、自分のコアは何か、そして自分が本当にやりたいことは何か、ストレスから解放されることは何か、それを見つけることができたらからです。

ですから、婚活を「がんばる」という方には、頑張らずに「マイ・ハッピー・マップ」の作成をお勧めします。これでまず自分の本当のコアを見つけて、自分の魂の行く先を定めるのです。そしてストレス・フリーになるカギを浮き彫りにするのです。これは一人一人違います。自分にとって、何がハッピーなのか、それを見極めること、それが一番大切なのです。

「マイ・ハッピー・マップ」を作るときに注意点があります。それは、お金が無い、時間が無い、能力が無い、これを考えないことです。誰にみせるわけでもありません。お金が無いのに、そんなこと考えて・・・と人から指摘されることはないのです。楽しんで書いてください。今、時間と、お金と、自分の能力、これが限りなくあったら、あなたは何をしたいか、それをマップの中に落とし込んでいくのです。

また、「悩まない」ということも大切です。これをしないと後悔すること？そんなの無いけど・・・と思ったら、そこはおいて置いて、ストレス・フリーを記載してください。悩まずに、直感で考えて、パッと頭に思い浮かんできたことを、どんどん書きこんでいきましょう。悩まないことです。まずはがっちり構えずに、リラックスして楽しみながら、「マイ・ハッピー・マップ」を作ってみてください。

第４節　　留学・バカンス・BRICS、後悔しない生き方

皆さんに具体的なイメージを持っていただくために、私、ユキーナ・サントスが作った「マイ・ハッピー・マップ」をご紹介しましょう。婚活アウトローでいい、私のことは放っておいて！と思った時に作った、私がこれだけはしたいと思うことのリストです。そしてさらに私をストレス・フリーにすること、つまり私が本当に好きなこと、これをリストにしましたので皆さんに例として紹介します。

第１項　留学して、世界を見る

これができなければ化けて出るなぁ、と思えるもののトップは「留学」です。そもそもどうして留学したいのか、それも一緒に書きました。それまでの１０年近くのキャリアで、いつも言われていたことがあります。「欧米はすすんでいるけど、日本はダメ」というフレーズです。私には、欧米の何がそんなに素晴らしくて、日本の何がそれほどダメなのか、判りませんでした。誰に聞いても、何の本を読んでも、釈然とした答えがありません。では実際にこの目で見てこよう。自分の目で直に欧米を判断したい、そう思っていたのです。

第２項　バカンスをしてのんびりすごす

姉たちが指摘するように、私はいわゆる独身貴族だったので、20代後半から30台初めは、海外の一人旅、個人旅行をたくさん楽しみました。たとえわずか1週間程度の旅行でも、いろいろな都市をかけめぐって、ツアー会社もなかなか組まないような内容の濃い旅行を計画し、若さに任せていろいろと旅をしました。けれども、一週間という短い期間だったので、限られた日数の中でいかに多くのことをするか、ということで私の頭は一杯でした。たくさんの場所を訪れ、多くのものを見て、美味しいものをたくさん食べて、欲しいと思うものをたくさん買って・・・本当に疲れる旅だったのです。もともとバカンスは「空っぽにする」という言葉から来ています。自分の頭をからっぽにして、ストレスをなくす、そんなゆったりした休暇がしたい、それも憧れの場所で、それが私の願いでした。

第3項　BRICS 探検

当時、成長が著しい国、として着目されているエリア BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国）、その国を実際に見てみたい、それはビジネスマンとしての私の願いでした。特にブラジルは見ておきたいと思いました。BRICS の中で、私が行ったことが無い国はロシアとブラジルでした。イタリア好きの私には、ラテンの国のブラジルの方が、なじみがあります。ロシアは寒い、という理由であまりテンションが上がりませんでした。

第4項　成功する男はブラジルにあり！

このときのマップに、「昇り龍」というメモ書きも残しました。これは私の思い込みですが、「いい男」、「魅力にあふれている男」は時代の機運に乗っているという考えがありました。私達、個人・個人の人生にも、日本の経済にも、そして世界の経済にも波があります。「いい男」というのは、この波、サイクルを肌で感じていて、ここぞという時に自分の本領を百パーセント、いやもっと二百パーセントまで発揮できる人たちではないか、と私は思っていました。どれだけ成功する素質をもっていても、時代の波に乗れないでチャンスをのがしてしまう男は、ちょっといただけないなと思っていたのです。そして女としては、こうした時代の波に乗ろうとしている男がいたら、その波を見極めて、うまく成功できるように助けたいなぁ、とも思っていました。

日本を見てみると、戦後の高度成長からバブル期まで、この時期にチャンスをつかんだ人は、人間的にも魅力的な人が多いように思います。男として尊敬できる人は、日本の高度成長期に活躍した人たち、そんな先入観がありました。バブル崩壊後の日本には、なんとなく、「俺はダメ」という失敗ムードがあふれていて、「よし、やってやろう」という意気込みが見えない感じがしたのです。ならば、かつての日本のような経済成長が望める国にいって、そこでチャンスをつかむ人と人生を送る方が楽しいのでは？おそらく私の潜在意識にこんなイメージがあったのかもしれません。「昇り龍」というと「おいおい、やくざの背中の入れ墨かい！」と突っ込みを入

れたくもなりますが、当時の私は、衰退の雰囲気よりも、上昇・発展のムードに憧れていたのです。

第５項　踊ること、イケメンと私、シャルウィーダンス

過去の私の写真を見てみると、本当に幸せそうにしているのは、踊っている時の写真です。このマップを作った後に、私は実際に留学して、イタリアで過ごすのですが、私のベストショットはこの時の「MBA 卒業、最後のお別れパーティ」の時のものです。どれもこれも、至福の時を物語っていますが、その理由は、「イケメンと私、shall we dance!」シリーズだったからです。このパーティの前、4ヶ月はアメリカで暮らしていました。アメリカ生活は、授業その他は多いに充実していたのですが、生活に最も大切な二つのものが無いので、私は本当にがっかりしていました。かけているものとは、一つ、ゴハンがまずすぎること、二つ、イケメンがいないことです。とにかくアメリア人はダサいのです。本当にダサいのです。「お前らに美意識っちゅうもんがあるのかぁ！！」と喝を入れてやりたくなるほど、ダサダサなのです。

このパーティの夜は、久々に美味しいイタリアンをたくさん食べました。美味しい野菜料理、パスタ、そしてドルチェを地元の赤ワイン、バルベラでのみ、あぁイタリアの食生活！！と嬉しくなりました。そしてその後みんなでディスコに繰り出したのです。あぁ、これぞ美形の国イタリアと思わせるイケメン達を見て、久々にテンションが上がりました。こんな背景があったので、私はニコニコの満面の笑みを浮かべて、踊りながらカメラに収まっているのです。

第６項　笑い、楽しいこと

ストレス・フリーにするもの、として、「笑い、楽しいこと」とも書きました。物まね、漫才、ギャグ、だじゃれ、楽しいことは大好き、昔からは物まねをしては、家族やクラスメートを笑わせてきた私です。この笑いを抜きにはストレス・フリーは達成できないのです。

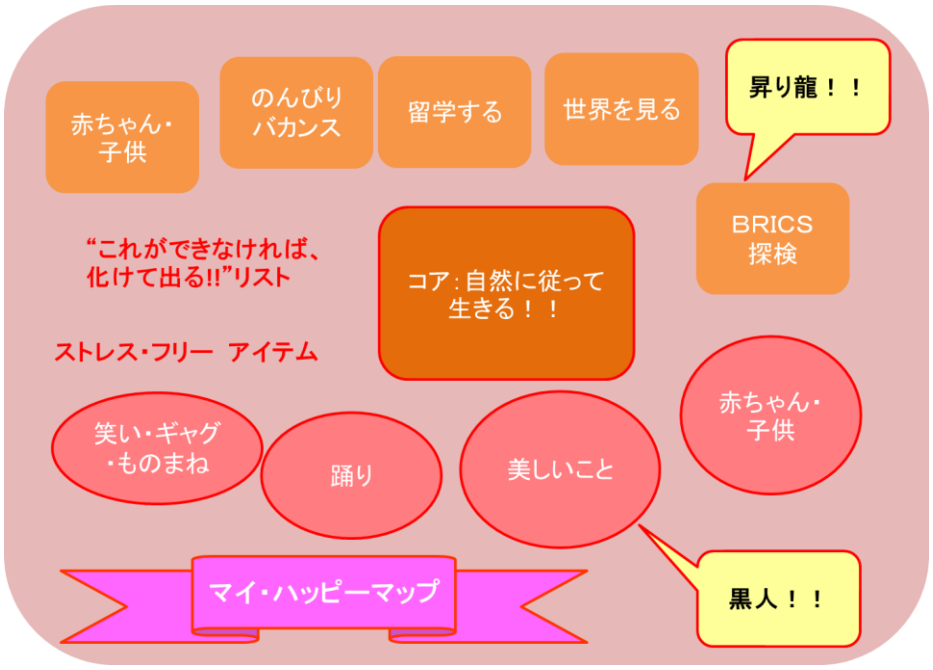
第７項　美しいということ

私はさらに、ストレスを取るものとして、「美しいもの」と書きました。そしてその下に「黒人」というメモもしました。私は昔から、黒人をとても美しいと思っていたのです。黒人は奴隷になった、という不幸な歴史があります。けれども神様は彼らに、何色でもおしゃれに着こなしてしまう肌の色と、どんなデザインの服も一流ブランドに見せてしまう魔法のプロポーションをもつ体を与えたのです。彼らをみていると、私はいつもそう思います。オリンピックやスポーツ中継を見る時も、私は、まず彼らの肉体の美しさに感動していました。そして、この神様の技を思い、彼らの身体能力の高さにも驚いていたのです。あまりにも黒人が好きなので、この後の MBA でも

大学内で、黒人サークルの集まりに何度も参加してしまったほどです。

第8項　やわらかな赤ちゃん

そして、「これがないと私は化けて出る」、の欄と「大好きなもの」の両方に、「こども・赤ちゃん」と書きました。姉の二人の子供たち、生まれた時からしょっちゅう面倒をみてきました。時には自分の子供のように、愛して接してきたつもりです。子供たちからはたくさんの笑いをもらいました。子供のいない私が子育てもどきを体験させてもらったのも、姉たちのおかげです。子守や「こどものいる暮らし」を少しでも体験させてもらった点で、姉たちには本当に感謝しています。



私がこうして「マイ・ハッピー・マップ」を具体的に作ったことが、その後の婚活大作戦を成功に導くカギになりました。なぜなら、こうしたマップを作ることで、漠然としていた願望が具体的なイメージになり、実際の出来事として実現していくからです。次章はどうやって私の運が開けて、願望が実現していったか、それをご紹介しましょう。

第2章　結婚への近道、ストレスを除くと、あなたの運がぐんぐん育つ

第1節　会社を辞めたら・・・みるみる運が向いてきた！

第1項　最初のストレス・フリー、会社を辞める

マイ・ハッピー・マップを作ってから、「ストレスを取る」、「心の毒をなくす」、ということを、私はいつも考えるようになりました。通勤の間も、家でも職場でもずっと考えていました。私にとっての大きなストレスは、人から与えられる婚活のプレッシャーでした。それが、「婚活アウトロー宣言」で、私の中のストレス・ランキングからスパッと抜け落ちました。もう婚活はストレス・ナンバー・ワンではないのです。そうなるとナンバーツーのストレスが浮上してきました。それは、当時の会社勤めでした。

とにかく非効率と不公平、不条理が蔓延していた会社でした。働けど働けど、私の暮らしは楽にならなくて、じっと手を見る・・・そんな毎日でした。何か自分が社会主義国にいて、自分が生み出すGDPのすべては、国家主席と一部の党幹部に吸い尽くされている、そんな気がしていたのです。その思いは年を重ねるごとに強くなりました。留学の願書を出していたアメリカの大学院から不合格通知が来たとき、「勉強に専念しますから退職します」と私は辞表を提出したのです。十二年勤めた会社でしたが、未練も何もありませんでした。思えば、そのストレス環境から抜け出したことが、その後の私の人生を、これまた大きく変えていったのだと思います。

第2項　そうか、運を育てよう！

その時に、私よりも前に会社を辞めていた、もと同僚の方から、「運を育てる」という本をもらいました。その方はこの本を「座右の書」として、困った時にはいつも読んで参考にしている、というのです。これは、米長邦雄（永世棋聖）氏が書かれたもので、氏の自伝的な要素も含んだ、成功するためのヒントを集めたものです。将棋のような勝負の世界では実力の差もさることながら運にも左右されます。いかにして運を良くするか、どうすれば勝利の女神に好かれるか、その秘訣が、米永氏の視点で書かれています。お弟子さんの一人がプロになれるかどうかという、その瀬戸際だったとき、米長氏がこのお弟子さんに次のようなアドバイスをしました。

お父さんの墓参りに行け、花も何も持って行かなくていい、ただ墓前で手を合わせお父さんと話して来い。

そしてこのアドバイスを忠実に実行したお弟子さんは見事、対局に勝つことができたので

す。

このエピソードが頭に残り、私も同じことをしました。私の両親は健在ですので、かつて自分をとても可愛がってくれた人、私の祖母の墓を訪れ、手を合わせて「私に運を！」とお願いしたのです。そして、この数週間後に、私は、なんとMBAから合格通知を受け取ったのです。もともと一般の専門大学院よりも、MBAの方がハードルが高いのです。要求する英語のレベルも格段に違います。もともと私の英語レベルでは、入れるはずもなかったのです。ですが、私に合格通知をくれたイタリアの MBA には、このダメ元で、私がイタリア語で書いた出願理由書も併せて提出したのです。

イタリア語は本当に好きで始めた言語でした。歌うようなリズムも、聞きやすい発音も大好きで、私は仕事の合間を縫って語学学校に通い、NHK主催のスピーチコンテストに出場するまでになりました。この時のスピーチ原稿も参考資料として付けたのです。おそらくイタリアの学校では、「この日本人、こんなこと書いてるよ、しかもイタリア語で！！」とかなり異色な受験者としてウケが良かったようです。8月から講座が始まりますから、ビザの準備をしてください、という案内を手にした私は信じられないような思いで、入学許可書（アドミッション）を見つめていました。

第3項　お手本は「坊ちゃん」-不器用、下手、損する人-

この「運を育てる」には、自分が勝利の女神に好かれるために、いざという時に、どうすれば運をつかむことができるのか、そのヒントが書かれています。これらのヒントの中で、特に私の心に残っているのは「不器用で損をする人になる」というアドバイスでした。いつも抜け目なく立ち回って得する人よりも、鈍くて不器用で損をする人、そういう人に運が向いてくる、というのです。

「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。」と自分を表現するのは、夏目漱石の坊ちゃんですが、私もこのタイプだなぁと思うことがあります。上の人に媚びへつらって、ヨイショをするということができないのです。この仕事は自分にとって損になるからやめる、あの人と付き合っておくと後で得するから友達でいる、という、いわゆる損得勘定にしたがった選択ができないのです。婚活においてもそうで、相手に媚を売る、ことに嫌悪感を感じていました。ピンクの服を着て、控えめそうな楚々とした態度で写真をとって、と言われても、そんな自分らしくない写真は撮りたくない！と言って姉を怒らせたりもしました。

けれどもこの本を読むと、賢く、抜け目なく動くよりも、鈍く損をするような正直者でいる方が、運が向いてくるとわかったのです。このアドバイスは、とても私を勇気づけてくれました。多くの

結婚難民の方が、自分の不器用な性格をネガティブに見ていると思います。けれども悲観することはありません。「したたか」にならなくていいのです。器用にならず、不器用でいいのです。そうすれば運が向いてきます。

私は、損得勘定で動かない、それでいい、と自分を肯定したとき、とても楽になりました。好きか嫌いか、これを判断基準にして行動すると、いろいろなことが楽になり、その方が、物事がうまく回っていく、ということに気付きました。このイタリアの入学許可も、これを受け入れることが自分にとって、損か得かは考えませんでした。イタリアという、自分が大好きな地で、ビジネスの勉強をする、その「好き」の感情をとることにしました。

その後数年たって、MBA終了後に就職試験を何度か受けることになりますが、私がこの面接の相手を好きかどうか、それを判断基準にしてきました。給料、ネームバリュー、ステイタス、などいろいろ会社を決める判断基準がありますが、私はこの好き嫌いをとることが自分にとっての成功の鍵だと思っています。

第２節　思い切りバカンス、頭も心も空っぽにして！

第１項　何もしない贅沢

会社を辞める前から、やめたら真っ先にバカンスをしようと思っていました。これをやらなければ、死んでも死にきれない、ということは、どんどん実行しようと思ったのです。やめたのは、６月、日本はジメジメした梅雨ですが、イタリアは最高の季節です。あぁ、今こそ、その時がきた、待っていたタイミングが現れた・・、よし、イタリアを放浪しよう、私は迷わずこう思いました。

行先は私の好きな映画「イルポスティーノ」で撮影された、シチリア島北東部の小島、サリーナ島です。私の友人と二人で三週間、シチリア島とその近くの離島をゆっくり旅して回りました。離島だけあって、海の透明度は絶品です。太陽と真っ青な海、白いヨットと白い屋根、人もまばらなリゾート地、それがサリーナ島なのです。サリーナ島にはまるまる三日間滞在し、映画に出てくる詩人「パブロ･ネルーダ」の家を見たり、毎日毎日、真っ青な海で泳ぎました。夜は、魚介と白ワインなど地元の食材をたっぷり使った郷土料理です。そして毎晩、ワインを片手に外にでて、満天の星を見上げ、ずっと夜空を眺めて過ごしました。

サリーナ島ですごした最後の夜のことは、今も良く覚えています。屋上のベランダで横になって、夜空の星をあおぎました。もともと小さな島なので、明かりも少なくて、流れ星が見えそうなほど、群青色の闇が広がっていました。風も心地よく、岩に打ちつける波の音だけが聞こえ

ていました。この世界に自分達だけではないかと思うほどの静寂でした。友達も私も、しばし無言でした。呼吸をするたび、深く肺に入ってくる空気、それがとても心地よいと感じました。仕事をしていた時は、甲状腺の病気のせいで、心臓の動悸が激しくなることがあったのですが、ヴァカンスにでてから、動悸はそれほど、いや全くと言っていいほど、気にならなかったのです。沈黙を破るようにして、私はイタリア語で「イルモメント・プレチオーゾ（本当に貴重な瞬間）だね」と友人に言いました。彼女も本当にそうだねと言って、また、頑張って働いてここに来ようと思う、と付け加えました。

毎日太陽を浴びて、海で泳いで、この星空の下にいる、そのこと自体が、私には幸せで、涙がでるほど、ありがたい体験でした。おそらこの後、たとえ留学できたとしても、毎日毎日、真剣に勉強しなければならないのです。いろいろなことを乗り切らなければならないでしょう。けれども、この空を、この瞬間を忘れずにいよう、そうすれば勉強も留学も乗り切れる、と私は思いました。このバカンスでは、豪華な五つ星ホテルに連泊していたわけではありません。グルメ料理を食べつくしているわけでもないのです。ただ、太陽のもとにいて、海と一つになり、星空を仰いでいるのです。これが私にとっての最高の贅沢でした。なぜならば、心のエネルギーを十分チャージすることができたからです。いくらお金を使って美味いものを食べても、こころが満たされなければ、エネルギーは出てこないのです。いい服を着て、人に自慢して、人からうらやましがられても、心が冷えて寒々としていたのなら、エネルギーは生まれてこないのです。

その時の私には、生きているということが、むしょうに有難く思えました。自分に活力を与えてくれる場所が、この世にある、それを発見したことが嬉しかったのです。おそらく私が生きている間、そのあとも、この地は太陽に照らされ、海は青く、夜は星で満たされ、自然はそのままずっと続いていくのです。自分はその自然の中にあって、自然と一体になっている、そんな感じがしました。あぁ、私は今、生きている、自然の中に生きている、そう実感できる、本当に貴重な瞬間でした。

第２項　よし、運が向いてきた、MBA への道

あらゆることがきちんとスケジュールされていて、絶えず時間に追われるのが、東京の生活です。でもイタリアには、何もしない贅沢な時間があり、至福の時を過すことができるのです。波の音を聞き、星を眺めて過す、時間が過ぎることさえも、まったく意識しない、とても貴重なひと時がイタリアにはあるのです。そうして星をみている瞬間、私はそれまでの、すべての嫌なことを忘れました。そして同時に、これが、バカンスにでかけることのメリットなのではないかと思いました。苦しみも、たとえそれが、ほんのひと時であったとしても、完全に忘れることができるのです。

怒りや悲しみは、体の機能の働きを妨げるそうです。そして、こうした体の機能の不活性化が病気の原因になると聞きました。怒ること、悲しむことは、こうした病気の原因を作っていることになるのです。貴重な人生の一分一秒を病気の原因で消費してしまうのは、愚かなことではないでしょうか。人生という長い時期の中で、一瞬でもいいので、こんな何もしない、バカンスの時間をもつことは、とても大切なことです。特に、日常ためこんだ、怒りや悲しみ、こういったものを何もかも忘れさせてくれるのですから、私達の生活に、意義あるものなのです。

長々とバカンスのことを書きましたが、それは、自分が本当にやりたかったことを、真っ先に実行する、その大切さを知っていただきたかったからです。私はバカンスを実行したいと思っていました、そして、実際にバカンスに行き、200パーセント？それ以上のエネルギーをチャージして帰って来ました。思いが遂げられて、満足すると、自分自身で幸運を呼び寄せることができます。ラッキーだな、と思うことがどんどん自分に舞い込んでくるようになります。その第一弾がMBAからのアドミッション（入学許可）だったのです。

第3項　いろいろなことが可能になる、いい頭とは？

「うわっ！！・・・ユキーナさん、あなた、頭いいですねぇ・・・」
イタリアでのバカンスから戻った私に、気功の先生がこう言いました。先生は私の頭に手をかざして、瞬間的に、気がバッと跳ね返ってきた、と言いました。先生いわく、私の頭から、強烈な気の跳ね返り、反発、エネルギーのほとばしりを感じた、というのです。

先生はさらに続けて説明してくれました。私の頭の中がエネルギー（気）で満ちていて、今は、何をするにも最高のコンディションで望める状態だとそうです。その時、私はいくつかのビジネスプランを頭の中で考えていて、ゆっくりでもいいから、高望みせず、無理なく自然体で頑張っていこうと思っていたのです。その幸先（さいさき）いいかも！というサインが合格通知だったのです。バカンスから帰国して、真っ先に開いたメールにはイタリアMBAからの緊急連絡が入っていました。合格通知を送ったものの、私の連絡がないので、事務局は一体どうしたのだろうと心配していたのです。悠長なことに、私はこの間サリーナ島でのんびりと泳いでいたのでした。学校に大急ぎで連絡を取って、送金と書類送付を済ませました。

また再びイタリアの太陽を浴びることができるのです。私にとってはこの上もない幸せでした。

第3節　地図の読める女になる！カウンセラーに惑わされない！

第１項　地図に関する男女の差

運を育てるために、もう一つヒントをお教えします。それは、結婚相談所や世話焼きおばさん、婚活勝ち組の先輩たちから、一切意見を聞かないとういことです。彼らからのアドバイスは聞かない方がいいでしょう。事実、私も「誰のアドバイスも聞かない、放っておいてくれ！」という姿勢になった時に、パッと運が開けていったのです。

「地図の読めない女、話を聞かない男」というエッセイがかつてベストセラーとなりました。どうやら、この本の言わんとしていることの一つは、男と女の論理的思考の差ではないかと思うのです。

具体的に説明します。

男はとかく論理的なことを求めます。地図を前にして、自分が今どこにいるかを把握し、目的地がどこかを探し、そこへの最短距離を探ろうとするのです。男は生まれながらしにしてこのような能力を持っているのです。しかし女にはこのような能力は備わっていないのです。今、自分がどこにいるのか、目的地はどこか、どうすればそこに行けるのか、現状と図面を照らし合わせて、これらの情報を把握する、ということがとても苦手なのです。自分の現状も、行く先もわからない、そうなると頼りになるのは他人から得る情報ということになります。こうして彼女たちは地図を片手に、道行く人に、どこに自分がいてどの道に進めばいいのか、と教えを乞うようになるのです。

人の話を良く聞かなければ、自分の方向性を見失ってしまう、そういうことがわかっているので、彼女たちには、他人のアドバイスがとても大切なのです。しかし一方、男性は、というと、自分がどこにいてどの道をとればいいか、ということは自分でよく判っているのです。少なくとも判っていると信じているので、人の意見などは必要としません。人の意見、アドバイスを聞こうともしないのです。常に独断にしたがって、この道を行く！と決めた道を行こうとするのです。「話を聞かない」姿勢というのは男性のこうした理論指向性から来ているようです。

「地図の読めない女、話を聞かない男」の意味する内容は、こうした「他人の意見」に対する男女の感情の違いを表したものではないかと思います。女性は他人の意見を極力重視し、男性はそれをほとんど必要としない、このような違いを様々な例を引用して説いているような気がします。

第２項　婚活の地図が読めない女性

ですが、恋愛と結婚に関しては、この女性の「他人の意見至上主義」がマイナスに作用していることが多いように思います。

ほとんどの女性は、海外旅行に行った時、現地の街で、自分のいる位置がわからなります。そしてどこに行っていいのかもわからない、さらにはどの道をたどればそこに行きつくのか、それすらつかめず、地図をもってうろうろしてしまうのです。仮にあなたが、こんな風に地図を持ってうろうろしているとします。そこへ「御嬢さんお困りですか？」と声をかけてくれる現地人がいれば、喜んでアドバイスをきくでしょう。この現地人が指し示した方向へと勇んで歩きかけるのです。

またそこで別の現地の人がこの女性に声をかけ、「そこの御嬢さん、どこへいくの？えぇ、この教会？それなら全く逆の方向ですよ、次の角を左に曲がって近道を通って戻りなさい」と教えるのです。あなたは、これは大変、危うく間違った方向にどんどん進んでいくところだった・・と次の角を左へ曲がり、別の道をたどって目的の教会をめざします。彼女の進む道は、いけどもいけども教会に行き当たらず、また地図をみながら周りをきょろきょろしていると、現地の人が寄ってきて、別の情報を教えてくれるのです。

「なに、教会に行きたい？この辺に教会なんてないよ！観光客に有名な教会はここではなくて街のはずれ、ここからはとても歩いては行けないから、みんなバスかタクシーで行ってるよ」とタクシー乗り場を指差すのです。女性は疲労がピークに達しているのですが、痛い足をひきずってタクシー乗り場をめざしていくのです。

あぁ、それは私のこと、私のこと、と思い当たる方がたくさんいるのではないでしょうか？どういう訳かわからないのですが、女性はとかく、このような過ちを多く繰り返しています。人の意見にぐるぐる振り回されて、最終目的地には永遠に到達できないのです。お金と時間を無駄にして、同じ場所をずっとひたすら回っているだけ、そういう失敗をしてしまいがちなのです。

どうして、このような悲劇的な状況におちいるでしょうか？それは女性が、人のアドバイスを求めすぎるからです。他人のアドバイスを気にしすぎるのです。自分で自分自身が立っている場所がどこだかわからないのです。行きたい方向を把握する、それを把握するには、地図をきちんとみて考えて、照らし合わせればいいのです。考えるよりも前に、人のアドバイスを求めようとする。それがいけないのです。アドバイスばかり求めるので、結局はこうしたアドバイスに振り回されてしまうのです。

第３項　一流のカウンセラーとは

ここで重要なことをお話しします。実は、超一流のカウンセラーは、アドバイスはしないので

す。「あなたはこうした方がいい」、「ああするのが本当のあなたの幸せ」、などと言うカウンセラーがいたら、それは三流のカウンセラーなのです。で、そういう人たちからアドバイスをもらっても、それは問題解決にはならないのです。

私はあるボランティア活動を通じて適切なカウンセリングを学びました。私は本当に困っている人のためになる、あるべきカウンセリングというものをブラジル人の講師から学びました。ブラジル人の生活を助けるためのカウンセラー養成講座に通い、カウンセラーとなりました。カウンセリングを行う対象がブラジル人だったので、講座はすべてポルトガル語でしたが、内容はどこの国の言語であってもあてはまる、普遍的なものだったのです。

講師の先生からは、常に相手のいうことを良く聞き、一緒に考えるようにしなさいと言われました。考える姿勢とはどういうことかを教えてもらいました。カウンセリングは相手の言うことを真剣に集中して聞きます。そして、本当に心のなかでわだかまっていることが何なのかをさぐるのです。その本当のわだかまりを本人に気付かせて、相談者の心のしこりをとっていくのです。こだわりの深いところを本人が意識して解決できるようにするのです。

カウンセリングができることは、実はそれだけなのです。相手が解決できる手助けをすること、これがカウンセラーの役目です。実際は、それ以上のことをしてはいけないのです。なぜならば、こと恋愛と結婚に関する悩みは、あなたの人生の悩みであり、解決策は、他ならぬあなたの人生に直接関係してくることなのです。誰もあなたの気持ちを、百パーセント理解することはできないのです。ですから、その理解できないものを、おそらく悩みとはこうであろう、だからこういう解決策を採るのが一番いい、とおすすめ策を提示し、それで終了というのは、あまりにも無責任な態度です。こんな風にアドバイスを口先だけで示すのは、無責任この上ないのです。カウンセラーにできることは、解決策を一緒に考えていこう、そういうサポートだけなのです。

私の婚活が上手くいったのは、私が「マイ・ハッピー・マップ」を自分で考えながら作ってからです。自分の現状を把握して、やるべきことと好きなこと、ストレスからの解放を考えていたからなのです。とことん自分で考えて、自分で納得して出した答えなので、それにしたがって行動している限り、後悔は何もないのです。

地図を片手にきょろきょろしているあなたに必要なのは、「どこへ行くの？教会？教会でなにをするの？え、祈りたい？・・・ふーん、そう、どんなことを祈るの？」とあなたの心の内を聞いてくれるカウンセラーなのです。カウンセラーとの話を通じて、自分のこころを解放して、自分が本当にたどり着きたい目的地を理解するのです。そして目的地が判ったら、その目的まで道のりをさがしていくのです。女性たちに必要なのは、何百、何千のアドバイスよりもむしろこうした発見へのヒントなのではないか、と思います。

このブラジル人の先生は、「相談者中心で決してアドバイスしない」という姿勢を貫いていました。この姿勢が結局、幸せな結婚探しには一番重要だったのです。私は今、自分の身をもってこの事実を理解しています。どうか人のアドバイスには振り回されず、解決策は自分でみつけて行ってください。

第４節　インド人のお告げ、直感を信じて

第１項　素直なこころ

「マイ・ハッピー・マップ」を着実に一つ一つ実現していくために、もう一つ重要な態度があります。それは、素直な心、ということです。人の意見にいつも振り回されているようでは、婚活は成功しませんが、直感で、これは信じてみよう、と思ったことは素直に信じなければいけません。私が、冷えとりを通じて、体の毒を出すこと、自然に従て生きること、こうした自分のコアを探し当てることができたのは、直感で、「この先生の言うことは信じてみよう」と思ったからです。ここでは私の身に起こった、不思議な予言の話をしましょう。私が、信じる素直な心持っていてよかったと思ったエピソードです。

第２項　香港のインド人

私はMBAを終了した２００６年のお正月を香港で過ごしました。職探し兼遊びの旅でヨーロッパからアジアまではるばる遠征して来たのです。

香港は返還前に一度訪れていました。お決まりの観光コースをまわり、ガイドブックに載った店で食事し、化粧品を買い込んで帰ったような気がします。日本人の旅行にありがちですが、観光地はとりあえず制覇して、帰りました。今回はフライトが遅かったこともあり、朝寝をして、のんびりお風呂に入り、身支度をして外出しました。九龍公園をぶらつき、様変わりした香港をゆっくりと眺めていたのです。

元旦の日差しはとても暖かくて、気持ち良く散歩できました。街全体に、躍動感と活気があり、文化的にもずいぶん多様化したなぁと思いました。何よりも空が青くて綺麗だったが印象的でした。中国庭園の竹林では、おじさん達が将棋に興じたり、少し離れたところから、インドネシアダンスミュージックが流れてきます。西洋人、インド人、あらゆる人種が元旦の休日をのんびり過ごしていました。

私もしばらく、空を眺めてぼうっとしていました。

これだけたくさん、いろんな国をまわっていると、それぞれの土地で水が違うので、体がとても疲れるのです。地元の空気というか、その土地の気を強く感じてしまい、バランスを失うこともあります。そうか、だからわたしは空が見たくなったのかもしれない、と空を見上げて思いました。未来永劫かわらない空、そんな空を求めていたような気がしました。

九龍公園にはチムサッチョイイーストから入りました。それなら、反対側に大通りがあるな、と予測して、反対側に渡ろうとしました。人の流れに沿って歩き、歩道橋を渡って、新しく開発された湾岸エリアに出ました。湾岸エリアは珍しいので、写真を何枚か撮って、広場をぶらつき、そして引き返そうとしたのです。

するとその時、私を追い越すようにして、声をかけてきた人がいるのです。この湾岸広場の植え込みに、腰掛けていたインド人でした。ターバンを巻いているので、おそらくシーク教徒でししょう。

「あんたには、幸運の相がある。」
はぁ？っとキョトンとする私に、このインド人は話し続けます。
「俺は、占い師だ。俺にはわかる、俺は滅多に人に声はかけないが、あんたには強運の相がある・・・いいか、２００６年の二月にいいことが三つ起こる。その運を逃さないようにしろ・・」
こりゃ、参った、何かのタカリかもしれない、と私は内心思いました。申し訳ないが、私はお金を持っていない、と私はこのインド人に答えました。事実、お金が必要なので、両替所かATM を探していたところだったです。

私の反応には動じないで、彼は手に持っていた手帳？風の小さなブリーフケースから何か、本当に、本当に小さな紙切れを取り出し、くちゃくちゃ丸めて私の右手に握らせました。今まであんまりいいことは無かっただろうが、今年が幸運の年だ・・等と話しかけながら、彼はさらに続けるのです。

「お前の好きな花は何だ？」
とっさに浮かんだものは、バラでした。私は rose だと答ました。占い師は彼の手帳の中に挟んである、これまた別の白い紙に rose と書きました。
「お前の好きな色は？」
また、このインド人が尋ねました。緑？一瞬間をおいて私が答えました。彼が再び問いかけます。

「好きな色は？自分が好きな色、と聞かれてすぐに思いついた色、それは何だ？」
私は自分の頭の中に直感で浮かんできたものを、つたえました
「・・・いろいろ、好きな色があって、今頭に浮かんできたのは緑とピンク・・」

このような心理反応テストは、直感で答えなければいけないのです。昔から緑は気に入っていたのですが、イタリアにかぶれてから、自分の色、マイカラーを持っていませんでした。最近の私が引き寄せられる色、それは何といってもピンクです。
「緑とピンク、どっちがより好きな色だ？」
というインド人の問いかけに、私はすかさずピンクと答えました。彼は rose の下に pink と書きこみます。このインド人は、最初に紙切れを握らせた私の右手をつかみ、その握ったままの右手に、私が自分で息をかけるように、と言います。言われたとおりにしてみました。インド人が手元にもっている紙、その紙の下はしに、インド人は私に説明しながら数字を書いていきました。
２００３年、２００４年、２００５年とお前はアンラッキーだった。少しいいことがあっても、波は一定ではない。だが今年は違う、２月に3つ、いいことがある
インド人はそう言って、紙切れに HBP と書き込みました。
なぜ HBP？ハッピーとは全然スペルが違う・・、私はこの謎の暗号メモに困惑していました。
「今のお前もいい顔立ちをしているが、心に不安がある。何か確かではないことがあるから、不安に思っているんだろう。それも2月になれば、消える。」
この辺はおおいに当たりでした。近々に私の将来についての重大な知らせが来る予定になっていたのです。ドイツの不動産銀行が、私を雇いいれてくれるか否か、という採用の通知が、私に充てて届くようになっていたのです。ですからそれまで、自分の居所は定まらず、甚だ不安定な身の上だったのです。

今までやっていた悪い習慣をやめろ。飲酒、喫煙、ギャンブル・・だが、お前の場合の悪い習慣はちょっと違う。秘密主義だ。思ったことは声に出して言え、そうでないとせっかくのチャンスを逃すことになる。
インド人がつづけてこう言いました。これは確かに当たっています。お酒で危ない目にあったことが過去何回かあったのです。この占い師が、もう一度、握りこぶしに息をかけろと言いました。私は、言われたとおりにしました。さらにインド人が私に指示を与えました。
お前は幸運だ、ラッキーだ、さぁ手のひらの中に握ってある紙を開けてみてみろ！

この言葉に促されて、掌の中の紙切れを開けてみました。
Rose、pink という二文字が書いてあるのです。インド人が私の目の前で書いた文字と同じ内容です。けれどもインド人が書いた、数字の落書きはないのです。その紙切れを、彼の持つ手帳の中に挟めといいます。その手帳の中には、ひげの生えた老人の白黒写真が挟まってい

ました。インド人は紙切れをその写真の上に置けといいます。

言われたとおりにしました。

いいか、今年の二月に現れる男性は決して逃すな、その男はお前の待っていた運命の相手だ、お前は愛情に溢れた人間だ。深い愛で、満たされている。だから、お前の人生は89で死ぬまで、十分成功できるし、幸せな死を迎える。お前は死の苦しみからは遠い存在だ。悪い習慣さえやめれば・

インド人がしゃべるアクセントの強い英語で、このインド人は矢継ぎ早に、さらに私に語りかけました。そして、さらにいくらか金は無いのか？と言いました。私は、財布から100ドル（1500円）出しました。この占い師にとっては不服だったらしく、手帳のページをパラパラめくって料金表を私の前に差し出しました。300ドル、600ドル、900ドルと幸運のレベル？によって料金が違うらしいのです。

さらに50ドルをプラスして、本当にもっていない、日本円すらないと答えました。彼は私からこれ以上取れないと悟ったのでしょうか、小さな赤いプラスチック玉のような石をとりだし、これを持っていろと私の手に押し付けました。そして、スタスタと歩きかけ、「とんずらモード」になっていったのです。 そして、去り際に振り返って、もう一度、私に諭すように言いました。

「いいかユキーナ、俺の言ったことを忘れるな、特に悪い習慣、秘密主義を直すことだ、お前は世界のいろいろなところを旅して、たくさんのことを経験している、失敗も成功もどちらも経験しているはずだ、なぜそれを黙っている。お前は黙っているだけで何も悪いことをしてない、そう思っているだろう。だがそれは、悪い習慣だ。お前の知識と経験は広く人とシェアするようにしろ。自分の中だけで囲い込んでいないで、オープンにしなければならない。いいか、秘密主義を直せ、忘れるなよ！」

このインド人は一気に私にこう語り、くるりと背中を向けて去っていったのです。

しばし、呆然として私はたたずんでいました。

次の瞬間、しまった！ やられた！と思いました。。

占いといいつつも、結局はお金を払わされてしまったじゃないか？これって騙しじゃないか！と思ったのです。けれどもすぐに、まぁ、いいか、「新宿の母」に見てもらったって最低3000円はかかるだろうから、と私は気を取り直しました。それにしても、あの手品は不思議です。いくら私が間抜けでも、掌に持たされているものはわかるし、たしかにあの紙も自分の手で開いたのです。その事実に間違いありません。それにしても・・・いったい、いつの間に仕掛けた

のか・・？謎は深まります。

さらに、このインド人は、なぜ私の名前を知っていたのでしょうか？お財布からお金を出す際に何か私の身分証明書でもみたのでしょうか？財布の中にある私のIDは運転免許証、日本語で書かれています。そしてMBAのIDはお財布の奥にしまってあるので、どんなことをしてもパット見にのぞいて、私の名前をみつけだして記憶する、というのはあまりにも無理があります。どうしてこの仕掛けが可能だったのか、いまだに謎なのです。

かつてインドを旅行した時、インド人に占ってもらったことがありました。私が28歳のときでした。そのときは30才で結婚、32才と36才の時に男の子を出産する、子供は全部で二人、という予言がされているのです。これは見事に外れています。そのインド旅行の時に、一緒に手相を見てもらった友人は、結婚の年、子供の性別と数までぴったり当たっているのです・・

昔のインド人の占いで当たっているのは、「以前の仕事をやめたときから運勢が向上する、」ということくらいでした。でも今回は、私の不幸な時期を当てたり、私の今の心の不安を言い当てたりしているのです。そして気になるのは、今年の二月の男性、というくだりです。

第3項　本物の占い師、沈黙はダメなり

インド人の占い自体、どれほど信憑性があるのかはわかりません。イギリスに長く住んでいる日本人の方にこの話をしました。「あぁ、良くそういうインド人を見かけますよね。ロンドンでもへーイ、ユー・アー・ラッキーマーンとか言って近づいてくる人でしょう？」というコメントをもらいました。どうもこの方の印象では、このインド人はよくみかける「うさん臭い」占い師のようです。けれどもまた別の日本人の方が、ちがう観点のご意見をくれました。この方もはやはりずっとロンドンに住んで現在も中東などいろいろなところで取引をされている方です。

「ユキーナさん、その占い師の方は、本物ではないですかね？だって、お金を払った後に、さらにアドバイスをしてくれたのでしょ？沈黙していてはいけない、どんどん自分の意見を外に広めていきなさい、これは、一番大切なことを、お金を払ったから教えてくれたのではないですか？その占い師のインド人には、本当は全部見えていて、ユキーナさんが、自分のノウハウとか体験談を秘密にしていないで、いろんな人に伝えろ、そうすればもっと運が開けてくる、そういうことを伝えてくれたのではないでしょうか？」

その方のご意見によると、このインド人は本当にスピリチュアルに目覚めている人、そういう結論になります。

どちらが正しいのかは未だにわかりません。ただ、このインド人の預言のとおり、私はその二月にブラジルに行き、私の夫となる男性と出会うのです。今にして思えば、このインド人の言葉が、私の記憶のどこかにしっかりインプットされていて、二月に出会った男性に特別なセンサ

ーをはって全身の毛を逆立ててチェックしていたようにも思えます。二月に出会った、これは!!という男性を、「この人は私の運命の人かしら？」という目でチェックしていたのかもしれません。

そして先にふれた「素直な心」これが大切だったのだと思います。インド人の言われるがままに、好きな花や好きな色を答えました。インド人のアドバイスに素直に耳を傾けました。そして、二月に出会った男性にセンサーを張ったのです。インド人をはなから「胡散臭い」と思って遠ざけていたら、この二月の男性のメッセージは、私の心に残らなかったと思います。もしそうなら、たとえ二月にブラジルに行って、多くの男性と出会っていたとしても、私は特別な目で彼らをみることはなかったかもしれません。すべては心の姿勢、素直な心で物事がみれるかどうか、なのだと思います。

いずれにしても、「運命の糸がたぐり寄せた」とでも表現できるでしょうか。私は不思議なきっかけで主人と出会い、その後、いつくかのドラマを乗り越えて結婚し、今に至るまでの八年間、幸せな結婚生活を送っているのです。

第４項　シウダージ・バイシャ

いまから思うと、こんな偶然があったのか、と不思議な気持ちになります。香港からヨーロッパに戻る飛行機の中で、ブラジル映画が上映されていました。「シウダージ・バイシャ（下町）」というタイトルです。

二人の男と一人の女、この三人組がリオデジャネイロからサルバドールという街に移り住む、そこから映画が始まります。途中、男の一人、白人系のブラジル人が、闘鶏場のいざこざで、酔っ払いと殺傷事件を起こしてしまいます。サルバドールの下町、シウダージ・バイシャに担ぎ込まれた白人男性は、もぐりの医者のおかげで一命をとりとめ、三人の生活がこの町でスタートするのでした。シウダージ・バイシャとはこうした世間の半端者が集まる貧しい地域なのです。彼らは、やくざの手下、八百長ボクシング、水商売と、こうした下町にありがちな仕事で日々の糧を得るのです。白人男性と、黒人男性、この二人が、一人の女性を巡って敵対するようになります、女性は妊娠していることに気づくのですが、父親は誰かわからないのです。

この映画では、ブラジル人の血の気の多さ、喧嘩っ早さ、彼らの情熱の激しさを上手く伝えています。さらに、ブラジルで生きるということ、ブラジル社会の貧困と犯罪も見事に描写しています。この世に生を受けてから、逆境に耐えて生きてく、それは時にはとてつもない苦痛になります。快楽も、人のぬくもりも、こうした痛み（ペイン）を和らげるために無くてはならないもの、この映画はこんなメッセージを送っているようです。

貧困に次ぐ貧困で、やっとの思いで稼いだお金では、食べ物すらろくに買えないのです。明日への不安を抱く暇もなく、彼らはその日を暮らすのが精一杯なのです。彼らが仮に、今日の糧は大丈夫だろうかと現状への不安を抱いたら、彼らの人生は失望だけになってしまうのです。事実と向き合うことしかできない。現実には、希望もなにも持てない、そうなったら、彼らの生活は本当に悲惨なものになってしまうのです。これをさけるために、ブラジル人は、毎日の生活を明るく乗り切ろうとします。日々の生活にわずかな喜びを見出す。これができるから、ブラジル人は皆、アレグリア（陽気）なのです。

思いがけず、ブラジルの生活と人々の陽気さ、その裏側を、この映画で垣間見ることができました。そしてこのシウダージ・バイシャの舞台になった街、サルバドールに、ちょうどこの主人公の男女と同じように、私はこの後、導かれるようにして流れ着いて行くのです。

第3章　理想のオット、ニガボンと運命の出会い、カーニバル in ブラジル

第1節　マチュピチュ・ナスカ、南米沈没、すべての道はブラジルへ！

第1項　思い立ったら即実行、今が南米行きの最大のチャンス！

MBA が終わってから、私は日本へ帰国する予定でした。けれども、自分の職をどこかに落ち着ける前に、ブラジルを見ておこうと思いました。これは私のマイ・ハッピー・マップに書いてあった、「これができないと化けて出る」リストの項目です。日本で正社員として働いたら、休みは取れなくなるでしょう、そうなる前に、自分に時間があって、ブラジルにそう遠くない場所にいる、その機会を逃さずに見ておこうと思いました。

ポルトガル語にもまったく接したことは無かったし、ブラジルの地理もあまりよく分かっていませんでした。けれども、とにかくブラジルをこの目で見たい！！という思いが強く、そして、化けてでないように悔いを残さないようにしよう！という思いに駆られて、そのブラジル行きのミッションを実行したのです。

MBA卒業後の二〇〇六年の二月、私は二〇〇五年の年末に受けたある就職試験の結果を待っていました。ヨーロッパの企業ではありがちなのですが、何人かの候補者と面接が行われ、最終的な結果が出るまで数か月待たされるのです。特に年末年始も入り、ヨーロッパの企業はクリスマス休暇に入ります。選考作業も滞るでしょう。私はかなり長い間、結果待ちをしなければいけないな、と覚悟しました。もし相手方が私を雇ってくれるなら、MBAを終えた後も、しばらくはヨーロッパにいることになります。けれども残念なことですが、もしお断りがくれば、私は荷物をまとめて日本に引き上げなければなりません。日本にかえるか、そのままヨーロッパに留まるか、すべて相手の結論次第なのです。その間、私は身動きがとれませんでした。

よし、そうであるなら、その結果待ちの間、旅行をしようと思いました。せっかくだからこの機会に、私の「化けて出ないためにすること」リストの項目を実行してみよう、と考えました。ブラジルだけでなく、他の南米の国も、この目でじかに見てみようと思いました。そして、一月にイタリアから南米に出発し、まずはペルーの知人宅に滞在したのです。

第2項　ファイト・一発マチュピチュ探検

この間、ペルーでも本当に悔いがのこらない素晴らしい体験をしました。世界遺産「マチュピチュ」を実際に見に行って、その聖なる山、「ワイナピチュ」に上ってきたのです。「マチュピチュ」

の絵葉書などをみると、区画された古代都市の街跡がみえます。そしてその向こうにひときわ高い山がそびえています。あれが「ワイナピチュ」なのです。そのワイナピチュまでの行程は、楽しいハイキング、とはとても言えないほど過酷なものでした。私は、自分の、このクライミングシーンは「ファイトォ！！」「いっぱぁぁっつ！！」にそのまま使える！と岩場をよじ登りながら思いました。そうして上ったワイナピチュからのマチュピチュの眺めは絶景でした。私はこれまでいろいろな場所を旅しましたが、あれほど感動した風景はありません。マチュピチュの街全体が大きなコンドルのような形に見えるのです。この空中都市が、まるで神様のもとへ舞い上がっていく使者のように、コンドルの翼がダイナミックに広げられているのです。あぁ、これで化けて出ない、今、ここで死んでも悔いはない、と私は思いました。

このペルー滞在では、就職試験結果がなかなか来ないのを良いことに、ナスカの地上絵を見に行ったりもしました。これも、自然と太古の神秘を肌で感じる、とてもエキサイティングな経験でした。そして、私のアドベンチャー魂だけではなく、やさしい母性も満たされたのです。ペルーで私が身を寄せた家庭には、生まれたばかりの赤ちゃんがいました。今にして思うと、子供がうまれたばっかりで、この外国人を良く家に泊めてくれたなぁと思うのです。私のペルー人の友人は、私というゲストのためにシャワーも改造して客人用のバス・トイレユニットを作ってくれたのです。なんという大きなお気遣いでしょうか！さらに私は、この生まれたばかりの赤ちゃんを、いつも自分の腕に抱くことができたのです。これはとても幸せな感覚でした。さらに、ペルーの様々な地方のダンスパフォーマンスがみられるイベントにも連れて行ってもらいました。マリナラというとてもノリのいいダンスを体験させてもらいました。

神秘の古代遺跡、赤ちゃんの柔らかさ、そして踊り、そうです、私の「マイ・ハッピー・マップ」が着々と満たされていったのです。これが、自分の中の気を大いに養ったのでしょう。その後のブラジルー大アドベンチャーを引き寄せる原動力になったのだと思います。どうも、「マイ・ハッピー・マップ」上のことを次から次へと着々と制覇していくと、自分の中のエネルギーがとてつもなく活性化するようです。このエネルギーは自分の体の気めぐりを最高の状態に保つだけではなはないのです。どうやらこのエネルギーは大地や地球の気とも溶け合って、私の「気」がさらに喜ぶことを現実の出来事として、私の目の前にもってきてくれているようなのです。

第３項　塞翁が馬、婚活成功のきっかけは就職不合格通知？

最初は私も自分の身に起こることが、信じられませんでしたが、「マイ・ハッピー・マップ」上のことを体験すると、決まって何かいいことが訪れます。そしてその体験がさらに自分の幸せ度をアップさせ、リスト上の「化けて出ない」ためのアイテムが次々に実現されていくのです。いい例が、このブラジル行きです。ペルーについてから数週間たった頃、先方の会社から「残念ながらあなたの採用は見送ります」というお断りのメッセージをもらいました。これ自体は、良く

ない知らせですが、私にはどうも、バッドメッセージには見えませんでした。そしてすぐに、そうか、それならブラジルまで足を延ばして旅をしよう、とむしろどちらかと言えばウキウキした心持で、私は残念メールを読んだのです。

ペルー・ブラジル、アルゼンチンとまるで南米に沈没してしまうまで、南米にいようと心に決めたのです。

この南米沈没からちょうど一年近くたったとき、東京で働いていた私に、もういちどこのドイツの会社の日本支店で働くチャンスが巡って来ました。この会社とは強い縁があったのでしょう。一度はお断りがありましたが、めぐりめぐって、再度私にお声がかかったのです。本当に不思議な運命のめぐりあわせだね、と当時東京オフィスにいたドイツ人の上司と話しました。この上司を私たちの結婚式に招いたとき、私は彼にスピーチをお願いしました。

「ユキーナさんとは、二〇〇六年に一度お仕事の話をしました、その時には実現しなかったのですが、その後、わが社はユキーナさんという素晴らしい人材を得ました。ユキーナさんは、わが社からのオファーがなかったので、ブラジルを旅行し、ご主人と出会ったそうです。そう考えるとわが社は、彼らの結婚に一役かったと言えるでしょう・・・」

ドイツ人上司はこんなふうに語ってくれました。まさにその通りです。この時、この会社が私を採用してくれていたら、その場で南米旅行を打ち切ってロンドンに行っていたのです。「運よく」お断りしてくれたので、私はブラジルを放浪し、主人と出会ったのです。

これも「マイ・ハッピー・マップ」を実行していた結果でしょうか？お遍路さんのように、次はこの場所、次はこのアクティビティとマップの中身を次々に実行しているのです。そのマップアイテム実行の過程で、私の中にとてもいい気がめぐり、それが大地の気と一緒になり、私の運命を変えて行ってくれている、そんな気がしてならないのです。

第２節　発見、私の場所！サルバドールで「ニガボン」をゲット

第１項　善人と悪人

ヴォセ　エスターバ　ムイト　ソルチ—あなたはとてもラッキーでしたよ！！—

何かにつけてオットは私にこのセリフを言います。私たちが出会った時の話になると、決まって彼は、自分と巡り合った「私」という人間が、どれほど運が良かったかということを、これでもかというほど強調するのです。

「俺みたいな、「超」善人と出会うなんて、運がいいとしか言いようがない」

とオットは続けます。しかし私は心の中で反論してしまいます。この世の中の一体どこに、悪

事を働く前から「自分は悪人です！」と宣言する人がいるでしょうか。

時代劇などで昔よく見かけたシーンでは、悪人が悪人らしく、ふるまっています。
「三河屋、おぬしも悪よのう・・・」「何をおっしゃいます、お代官様こそ・・・ウェッヘッヘッ・・・」などというやり取りはありがちなシーンではないでしょうか？けれどもこれは悪人同士がこっそりお互いのワルぶりを褒めあっているのです。彼らであっても、裏では、いかに悪事をはたらいていたとしても、表向きは、まっとうな商人、権威をきちんと傘に着ているお役人なのです。正面切って悪い人ですと吹聴することはありえないでしょう。

海外を旅行してみると、いろいろな出会いがあります。初対面で、外国人の旅行者の私に話しかけてくる現地人もたくさんいます。ただ私も、自分のまったく不慣れな文化圏にいるので、相手の善悪の判断は容易ではありません。相手が自分をカモとしてみているか、それとも私に話しかけてくれているこの現地人は、単純に親切ないい人で、自分に善行を尽くしてくれているのか、この判断はなかなか難しいのです。この難しい判断でも、これまでの多くの海外経験を振り返ってみると、私はほとんど間違えることがありませんでした。

だから、これまで私は生き延びてこられたのだと思います。イタリアであってもアメリカであっても、この人は大丈夫だろうと思える人とは、一緒にご飯を食べたり観光名所に行ったり、お友達になりました。その後も代えがたい友情を築いて、ずっとメールや手紙のやり取りを続けている人たちもいます。また逆に、「あ、この人には近づいてはいけないな」とピンと来た人に対しては、極力接触を避け、なるべく早くその場から立ち去るようにしてきました。こういう場合は必ずと言っていいほど、私の判断は正しかったと思える事実を聞きます。後になってから、他の旅行者を通じて、怪しい人にかかわってとんでもない目にあったという話をきくのです。そして、あぁやはり、あのとき早々にその場を立ち去ってよかった、と自分の判断が正しかったことをしみじみ実感するのです。こうした危機を事前に避けるということ、これができるのは、自分の経験と、いつも野性の勘を研ぎ澄ませている、そういう姿勢を持っているからだと思います。

第２項　謎の暗号、トミニガボン

この「自分の野性の勘」が、私の人生を最も大きく左右した出来事が二〇〇六年に起こりました。この年に私は、将来自分の夫になる運命の男性をみつけたのです。オットと初めて会ったのは、ブラジルでした。

頃は二月、カーニバルの時期でした。音楽と踊りです、どちらも私の「マイ・ハッピー・マップ」にある、私を喜ばせてくれる、ストレス・フリー・アイテムです。私はブラジルでカーニバルをとことん堪能してやるぞ！と意気込んでいました。リオだリオ、リオ！と頭に羽飾りをつけたような

気分になって勇んでリオデジャネイロに行こうとしていたのです。

ところが私の友人のブラジル人達はこぞって私のリオ行きを止めました。理由はどうやらセキュリティ（治安）の問題でした。
「女一人で、しかもカーニバルの時期にリオにいくなんて、死にたいのか、君は！」
と周りのブラジル人達が口々に言いました。友人のお姉さんの「ユキーナ、お願いだからやめて、そんな危ないことは後生だからやめて！」という言葉に、さすがの私も、リオ行きを思い止まったのです。

ではどこに行こうかと思った時に、MBA時代のブラジル人のクラスメートが私に言った一言を思い出しました。
「サルバドールのカーニバルは素晴らしい、この世のものとは思えないほど美しい、世界のどこに行ってもあんなユニークなカーニバルはないよ！」

そこまで言うなら、これは行かずにはいられないでしょう。私はすぐにサルバドール行きのチケットをゲットしました。友人の姉は空港に向かう私の背に「トミ、ニガボン！」と見送りのメッセージを送りました。当時の私のポルトガル語の知識でも、これが、「ニガボンをゲットしなさい！」という意味だというのはわかりました。ですが、肝心のニガボンが何のことなのかはさっぱり判りませんでした。

第３項　サルバドールとアフロライブ

さて、そうしてたどり着いたサルバドールは私の想像をはるかに超える場所でした。まず、街の雰囲気、建物の感じは、限りなくヨーロピアンなのです。白、クリーム、ピンク、水色、ペパーミント・グリーンなどカラフルに彩られた建物が並ぶ光景はヨーロッパの色彩なのです。この光景はイタリアに住んでいたときに嫌というほど目にしました。けれどもここサルバドールの街をゆく人々は黒、黒、黒、なんとほとんどが黒人なのです。

それもそのはず、後から知ったのですが、サルバドールを含むこのあたりはブラジル発祥の地でした。十六世紀にポルトガル人がこの地に降り立ったとき、サトウキビのプランテーションを始めました。広大なサトウキビ農園で働かせるために、大量の黒人を南西アフリカから奴隷として運んできたのです。今ではここサルバドールの人口の八割近くはこうしたアフリカ黒人奴隷の子孫なのです

町並みはヨーロピアンでも、街にあふれるのはアフリカンな黒人たちでした。歴史的中心地

域、ペロリーニョというエリアを歩いてみると、どこからともなく、ドラムを中心とした打楽器の軽快、かつパワフルなリズムが地を這うようにして響いてきました。こんな街は、世界のどこにも見つからない・・・私はそんな考えを抱きながら、ペロリーニョを散策しました。

サルバドールは海に突き出した半島の街なので坂が多いのです。ペロリーニョの坂は大部分が、ごつごつした石畳でおおわれています。天然の健康サンダルですか？と思えるほど、足の裏への刺激が心地いいのです。石畳につまずかないように注意して、ペロリーニョの目抜き通りになっている坂を下りました。と坂の右側に、ちょっとした広場が見えました。中にはステージのようなものがあって、聞けばここで毎晩ライブのようなものが開かれるそうです。そうか、ここでカーニバルのパフォーマンスがあるのかぁと私は単純にそう考えました。ところが、私のこの認識は大いに間違っていたのです。国土が限りなく広いブラジル、カーニバルのスタイルは地域や都市によって千差万別です。サンパウロにはサンパウロの、リオにはリオの、そしてここサルバドールにはサルバドール独自のスタイルがあるのです。

第４項　びっくり参加型カーニバル

広く知られているリオは、観覧型とでも表現できるのではないでしょか？設置された大コンサート会場に多数のサンバグループがパフォーマンスを見せるのです。

しかし、ここサルバドールはむしろ参加型、そして移動型なのです。一つの音楽グループにはだいたい二つから三つのトローリートラックが配置されます。トラックには各々、日本の演歌歌手のコンサート移動車のように派手な電飾やデコレーションが施してあります。歌手たちは基本的にこの先頭トローリー車の上に載って自分達のグループの持ち歌を歌い続けるのです。このトローリー車に楽団が続きます。二十人前後のメンバーは大小の太鼓やトランペット、サンバ特有の楽器などを使って、この歌手の伴奏を踊りながら奏でていくのです。楽団の後に一般の参加者が入ります。彼らはグループ独自のコスチュームを着て、音楽と歌に合わせて踊り続けます。

この歌手、楽団、参加者が一体となって、数キロの道のりを、例えば東京駅から日比谷公園くらいまでの距離を一晩中歌いながら、踊りながら練り歩いていきます。スタートは夜の１０時頃からで、この練り歩きは明け方まで続き、カーニバルの間の一週間、毎晩毎晩、街のあらゆる場所で、この動くバンド行列が続くのです。カーニバルの参加者は、昼間は眠って鋭気を養い、夕方になっておもむろに今宵の熱狂ダンスに繰り出します。毎年カーニバルに参加するバンドは二百以上もあり、海岸の大通り、街中の大通りは、バンドの参加者たち、これを見に来る観光客などの観客で、どこもかしこも押しくらまんじゅうのような混雑ぶりなのです。

私がサルバドールの初日で見かけたコンサート広場は、カーニバルの人気バンドが、カーニバル開始前の数週間に行う、プレイベント用のものだったのです。メジャーなバンドはここに観光客などを集めて、自分たちのバンドはこんな曲をやります、めちゃくちゃ盛り上がるからどうか参加してください、というPRを行います。このプレコンサートのライブをやるための、いわば前座パフォーマンス用のステージだったのです。

第３節　ストレス・フリーの瞬間、熱狂の踊りとダサダサ君

第１項　ムゼンザアフロライブ初体験

そんなプロモーションなら見に行かねばならないっ！と、最もアフロ色（アフリカンテイスト）が強いバンド、ムゼンザのライブに私は出かけたのです。オットと出会ったのは、このムゼンザライブ会場でした。

ユキーナお願いだから、超危険なリオはやめて、と私に泣いて頼んだのは、私のブラジル人の女友達、アライザのお姉さんでした。この姉さんには申し訳ないのですが、リオどころじゃないのです。サルバドールも十分危ないだろう！！というのが、このコンサート会場、テレサバッチスタに一歩足を踏み入れた私の正直な感想でした。超人気バンドだけあって、人の混み具合はハンパじゃないのです。ボブ・マーリィのような長髪ラスタファの人たち、このラスタに群れる白人女性の観光客たち、またまたこれをゲットしようとする地元のネグロ（黒人）たち、彼らが床にポイとすてるビール缶を拾い集めている少年少女たち、隙あらばと観光客の背後に近づこうとするホームレス達、この街のあらゆる人種がこの狭い広場にごった返しているのです。ある者は熱狂の中の音楽を、あるものはアバンチュールを、あるものは束の間のパトロンを、ある者は今日の糧を、それぞれが全く違うものを求めているのです。けれども熱気に満ちたこの会場に、自分のターゲットを得るために、限りないパッションを持ち込んでいる、その点が彼らの共通点といえるでしょう。みんな目の色をかえて、自分が求めるものを探してエンジョイすることに没頭していました。

会場内にうずまく欲望のカオスに呆然としている間に、バンドが入ってきて、観客の五臓六腑に染み渡るような打楽器のリズムを繰り出します。ズズダダ、ズンダ、ズズゥンダッダ、ズンダというリズムに私の体は思わず反応して踊りだしてしまいます。・・・うー、しまった・・・このライブは異様に楽しい、思う存分楽しみたいけど、この環境ではいつスリに狙われるかわからない。どこか安全な場所はないかしら、と私は会場中をぐるっと見回しました。バンドからさほど離れず、でも、ちょっとは安心して音楽に没頭できる場所・・・そんな場所を求めて会場内を見まわしました。ステップをかけ上がり、少し高くなっているスタンドから会場を見回してみました。

ステージ左横に目を移すと、そこでふと目が留まりました。

　ははぁ、あそこがいい、あそこに移ろう！あそこなら安心して、しかも思う存分このムゼンザを楽しめる！！私の目はステージの左翼にいる一人の黒人を捉えていました。このイケイケアフロの雰囲気には明らかに不似合いな、地味な服装なのです。おのぼりさんスタイルとでも言いましょうか、バミューダにスニーカー、背中にはリュックを背負っています。明らかにちょっとダサい出で立ち、しかもチリチリのアフロの髪を爆発させているのに、銀ぶちメガネというミスマッチが妙にコミカルな雰囲気を醸し出していました。だれに聞いても、この人絶対に泥棒じゃないよねぇ、という答えが返って来そうな、イケてない風貌の青年でした。この男の近くにいて、この人の連れのフリをしよう。そうすればこの混沌の中、思う存分アフロでノリノリになれる・・・こんな思惑で私はこの青年に近づいていったのです。

第２項　初めて交わした言葉

　ふらふらと自分の方に近づいてくる奇妙な東洋人に目を留め、彼は一瞬怪訝そうな顔をしました。けれども私が彼の側に寄り添うようにして、ステージの音楽にのって踊りだすのを見ると、アフロフリークな観光客女と思ったのでしょう、すぐに真っ白な歯をザッとみせて微笑み、私にこう尋ねたのです。

「ハウ・オールド・アー・ユー？」

　いきなり、歳をきくか！と一瞬ムッとするよりも先に、彼の意外に綺麗な英語の発音に、私は一瞬はっとしました。ブラジルに随分滞在していたのですが、こんなまともな英語を話したブラジル人ははじめてでした。しかも、その流暢な英語は、白人系ブラジル人ではなくて、黒人の口からでたものなのです。私はさらに驚きました。手足の動きをとめず、踊りながら、私は答えました。
　「トゥウェンティ・ファイブ-二十五歳-」
　彼は銀縁のメガネの淵から、グワンと弧を描いた黒々とした眉をギュッと吊り上げて言いました。
　「イッツ・ナット・トゥルー　それは本当じゃないでしょ！！」

　これが、私たちが最初に交わした言葉でした。このちょっとダサいおのぼりさんの横にいたおかげで、私はポシェットに入れたお金を盗まれることなく、現地の男達の、しつこいナンパに邪魔されることもなく、思う存分、このアフロのスピリットに溢れたライブを楽しむことができたのです。ライブの間中、彼は私に話しかけ、私はそのたびに適当に受け流していました。ライブが終わると、彼は早々に帰ってしまうのではと思っていましたが、帰り際に、私に連絡先の電話

番号が書かれた紙を渡しました。別に電話することもないなぁと思いながらその紙切れをポシェットにしまい、私はライブ会場を後にしたのです。

第4節　えっ、この人が私の運命の人？ニガボンそれは「善良な黒人」

第1項　善良な黒人

このライブで知り合った青年には電話をすることは無いと私は思っていました。人はいいだろうけど、ちょっとダサい感じだから、別に電話しなくてもいいかも、私の関心はこの程度だったのです。けれども、そのダサダサ君に電話をする羽目になったのは、このライブの翌日のことでした。カーニバルの後、ブラジルの他の場所への旅行を企画していた私は、旅行会社にお金を持っていかなければいけなかったのです。格安だったのでクレジットカードの払いは受け付けない、現金のみ用意しろと旅行会社から指示がありました。この街で多額の現金を持ち歩くのはかなり危険です。かといって支払いをしないわけにもいかず、だれかお金を身につけている自分を守ってくれないかしら、と考えていると、前日のムゼンザライブで会った、おのぼりさんを思い出したのです。

電話をすると、彼はほどなく私の泊まっているホテルに来てくれて、支払場所にも一緒にいってくれました。何よりも便利だったのは、この街のことやお金の引き出し方、引き渡しなど、英語で説明してくれることでした。彼の働きぶりに気を良くした私は、この街での滞在中、彼をボディガードにしようと思いました。ご飯をたべさせるだけで、いろいろなところについて行ってくれるので甚だ便利でした。サルバドールという場所はとてもユニークで、私がそれまでの人生で訪れた、どんな場所よりもはるかにエキサイティングでした。しかし同時に、私のそれまでの海外経験では一番危ない場所でもありました。特に女性の一人歩きは最も危険、それは間違いありませんでした。この危ない場所に、現地人のボディガードと歩けることは、私に何よりの安心感を与えたのです。

ペロリーニョの土産物屋を見て回るときも、レストランで郷土料理のムケッカを食べる時も、遠くの海に行くためにバスに乗るときも、彼はいつも口を酸っぱくして私にこう言いました。

「この街の黒人（ニガー）には悪い人がたくさんいる、観光客は簡単にだまされる。だから本当に注意しなければいけない。」

「へぇーそうなの、じゃ、あなたは？悪い人じゃないの？」

と私が切り返すと決まって彼は激しく頭を振って、

「ノー！！！俺は善良な人間-グッドパーソン-だ！！」

と何度も力説していました。

その度に、私は日本の時代劇のお代官様を思い出しました。最初から自分は悪人だと宣言する悪人がどこにいるのだろうと思いました。彼の力説ぶりを、冷ややかな目でみていたのです。まぁ見た目もちょっとダサくて、一本も二本も間が抜けているように見える人なので、彼が悪智恵を働かせて人の財布を狙うようにはとても見えませんでした。けれども、こう何回も言われると、この人、本当は私のお財布ねらっているのかしら、などとちょっと考えたりもしました。

ちなみに、良い、グッドはポルトガル語で何というの？

と尋ねると、「ボン」という答えが間髪を入れずに帰ってきました。私はぼんやりと友人のお姉さんが言っていた「トミ、ニガボン」の言葉を思い出していました。なるほどニガボンとは「いい黒人」の意味のようです。中身は別として、確かにここサルバドールの黒人達は男も女も美形が多いのです。おそらくサルバドールの黒人たちが最初に連れてこられたのがアフリカの特別な地域だったのでしょう。半年前に暮らしたアメリカでは絶対に見なかったタイプの骨格と造りです。さらに征服者の白人たちの血が微妙に混じっているのもでしょう。みんな目が大きく、さらに天然のアイラインで縁取ったように目がくっきりとキリリとしています。その大きく縁取られた目を、長くカールしたまつ毛がバチッと覆っているのです。私は横目で彼の顔のつくりを見ながら、この街の黒人たちは、全員がこんなに美形なのかしらんと考えていました。私の頭の中のことなど気に留めない様子で、このニガボンは、過去どれほどの外国人観光者がサルバドールで犯罪に逢ったかを切々と語っていました。

さて、カーニバルが始まると、この街の危険度はピークに達しました。私の参加するバンドは毎晩のように海岸通りを練り歩くことになっていました。しかし海岸通りにつくまでが非常に危ないのです。私は、このおのぼりさんボディガードに会場まで連れて行ってもらって、無事グループに合流しました。彼は私を、私が参加する予定のグループがたむろしている、練り歩き出発地点に連れて行くと、急な用事があるので、家に帰らなければならないと言いました。後に知ったのですが、この日、実は彼のお父さんが倒れて病院に運ばれたのでした。バンドの練り歩きが終わるのは夜中か明け方近くになります。それまでつきあうことはできないけれど、何かあったら必ず自分に連絡してくれ、「練り歩き」が終わって、ホテルに無事着いたらかならず自分に連絡するように、と何度も私に念を押して彼は帰って行きました。

この日はカーニバルのスタートも、ラテンのルールでだらだらと遅れました。「歌って踊れる練り歩き」が始まったのは夜中の一時、すべての行進が終わったのは明け方六時ごろ、そしてホテルに着いたのは朝の七時頃でした。ホテルのロビーにたどり着くと、レセプションのおじさんが、奥の待合ロビーを指差しました。何気なく振り返って私はハっとしました。このボディガード君が椅子に腰かけて眠っているのです。すぐに駆け寄って彼を揺り起しました。目をバチッとあけて彼は私を見つけ、太い眉毛を吊り上げて怒りました。

「どこに行ってたんだ？夜中過ぎても帰らなくて・・・どうして僕に電話しないんだ？僕がどれほど心配したか・・・」

怒りながら、彼はポケットに手を入れ、小さくたたんだ紙切れをとりだし、私に差し出しました。

「僕は、もうすぐ家に帰って、すぐまた出かけなくちゃならない、だからこの手紙を置いて行こうと思った、もう少しだけキミのことを待とうと思って、ソファに座ってたら眠っちゃったんだよ・・・」

彼から手渡された紙切れには、とても特徴的なローマ字でメッセージが書かれていました。

-ユキーナ、君は今どこにいるんだ！夜中にこのホテルに来て、明け方になっても、まだ君は帰ってこない！何度も言ったけど、街には悪い黒人たちがたくさんいる。君に何か危険なことがあるんじゃないかと思って、俺はとても心配している。これを読んだら、すぐ僕の携帯に連絡して、何時でもいい、必ず電話して！-

私は顔をあげて彼を見ました。一晩中踊った疲れなどすっかり忘れて、彼の目をずっとみつめました。

「ごめんね、・・・あなたが待っててくれたなんて知らなかった。」

私はシュンとして頭を下げた。

私の頭に自分の手のひらをかざして、ゆっくりと撫でながら彼が言いました。

「エウソウ　ニガボン　ネ！—（な、言っただろう）俺は善良な黒人だって-」

ゆっくり見上げると、ニカッと笑ったニガボンの口から、真っ白な歯がキラキラと光って見えました。

この日から、私はこのダサダサ青年のことを「ニガボン」と呼ぶようになりました。

そうして私たちは付き合うようになったのです。彼が格闘家（ファイター）であることも、どうやって英語を勉強したかも、学生であることも、語学学校でバイトをしていることも、ヤキソバをこよなく愛していることも、私は徐々に知っていったのです。

第２項　太く、確かなるライン

ちょっと手相の話をしましょう。

利き腕の掌を広げます。小指の付け根から薬指の付け根の方向に向かって刻まれているライン、これが結婚線です。私は手相占い師でも何でもないのですが、ただちょっと手相の本を読んで、この結婚線のことを知りました。この線は結婚についてだけではなく、過去や将来の大恋愛もこの結婚線からみてとれるそうです。結婚線が一本クリアに刻まれていたら、幸せな結婚を、二本みれたら、二回、結婚も含めた大恋愛を経験するのだそうです。

このラインを見るたび、私は決まって悲しくなりました。

自分の利き腕の小指の付け根には二本の結婚線があります。太いわけでも、長くくっきりしているわけでもない、まぁ、大して立派でもない線なのです。ですので、自分のチャンスがこの先いつくるかもわからないのです。そのあてにならないチャンスを永遠に待たなければいけないのか、と思うとため息がでてくるのでした。それともこの結婚線が示す恋愛とは、もう既に過去のもので、自分の将来には結婚を示唆するものがなくなってしまったのかしら、・・という考えも頭をよぎり、私はいつも悲しい気持ちで、自分の結婚線を眺めていました。

男の掌に刻まれる結婚線も、これもまた、私を悲しくさせていました。

一般的に、だれもが認める「いい男」が、いつまでも一人でいるわけはないのです。とっくにどこかの女性のパートナーになっているのです。日本国内のみならず、グローバルベースで、まともだなぁと思う男性には決まって奥さん、あるいはフィアンセがいるのです。そして何の気なしに、こういう男性の掌を見ると、決まって小指の下にくっきりと、一筋の結婚線が刻まれているのです。ほぼ例外なく、いわゆるマトモな男は「くっきり結婚線」の持ち主なのです。

出会っって三日目、私とニガボンはレストランで食事をしていました。お金は無いけどお腹はすいてる、とにかく何か食べようという事になって、歴史地区ペロリーニョにある、ちょっとばかりこじゃれたレストランに入りました。

私が手相を見れると知ったとたん、彼は嬉しそうに掌を差し出して、自分の運勢を見てくれと言いました。健康で、ちょっとやそっとではびくともしない立派な生命線がぱっと目に入りました。さらに親指の付け根、掌全体に厚みがあります。これは、強運の持ち主の特徴なのです。私の手相もそうですが、彼の頭脳線の先も二股に分かれています。これまた、語学の才能、運動神経の良さなど複数のことを同時にこなす、天性の頭の良さを示しているのです。

こういう男は、やっぱり、やっぱりだよねぇと先入観をもって、小指の付け根を見ました。

あぁ・・大当たりです。これまた、実に見事な一本の結婚線が、くっきりと・・・しかもかなり長く刻まれているのです。

あなたは、とても幸せな結婚をするわ、生涯でただ一度・・

彼に説明しながら、私の中でイメージが着々と大きくなっていきました。おそらく地元で彼と

一緒にすごした幼馴染かなんかがいるのでしょう。どこにでもいそうな、平凡な女性が、またしてもこの青年の傍らに、生涯寄り添って暮らすようになるのです。しばらくしたら、この青年もその女性に押されながら、あれよあれよという間に結婚することになるのでしょう・・・。

その日の昼間、街中で見かけた子供達のバンドを思い出しました。リズム感が良く、しなやかな体を駆使して伸びやかに踊るバイヤーノ（ここの地元の人）達・・・私の頭の中には、このニガボンが自分の子供を肩車し、一緒に歌など歌っているシーンが浮かんできました。

あなたは25？今度26歳になるのでしょう。そうしたら、もうすぐね・・運命の結婚相手と出会えるのは。あなたはその人を生涯かけて愛するでしょう。そして幸せな結婚生活を送るのね。大きな恋愛は人生でただ一度よ。

私のこの言葉を聞き、彼は少々不満そうでした。 25、6と言えばまだまだ遊びたい盛りかもしれません。私の言葉に口を尖らせて、彼はこう反論しました。

「だけどユキーナ、俺にはいろんな女が言い寄ってくるんだぜ！どうしてだかわかるかい？おれは頭もいいし、顔もいい、何よりマトモでいい奴なんだから・・エウ、エストウ、ニガボン、ネェ？（俺は善良な黒人だろう？）」

と彼は最後にこう付け加えました。

ちなみに彼が最後につけた、ネェ？はブラジルでは一日100回以上耳にする、だれもがよく使う、同意、承諾を求める接尾辞なのです。

まぁ、勝手に言ってらっしゃい、おそらくそんなでかいことをいったって、あなたはその将来の女房の尻にしかれて、一人の女からメチャメチャ愛される、幸せな男の生活を送るんだから・・キャンキャン吼える犬を横目でみるように、彼をなだめるような調子で私はこう言いました。そしてニガボンは私に、こう聞いたのです。

「ユキーナ、俺と結婚したいかい？」

何、バカなこといっているのよ！私達は三日前に会ったばかりじゃない、どうしてそこまで短絡的な発言ができるのかしら・・私は冷ややかにI don't think so..と彼の提案を撥ね付けました。私の冷たい仕打ちをものともせず、彼は

「ユキーナのそのカメラで、俺の写真を撮ってくれ！」

等と呑気なリクエストをしてきました。

しょうがないなぁと思いながらカバンからカメラをだしました。ついでにくしゃみが何回か連発で出たので、ティッシュも探そうとカバンを探りました。度重なる旅の疲れ、サルバドールの夏は暑いのですが、毛布をかけないで寝たせいか、この日はくしゃみが何度も出てきました。

私が鼻をかんだチリ紙をくしゃくしゃと丸めて右手に持つと、ニガボンがそっとその紙くずを取り上げました。何をするんだ、この人は一体？という私の好奇の目を気にもとめず、ニガボンはその紙くずの端で「こより」を作り、その先端をエイッとばかりに私の鼻の中に押し込んだのです。二、三回、こねくり回して、私の鼻の掃除を始め、私の鼻が綺麗になるのを見て、満足そうに微笑みました。「これでよし！」っと言って彼はニカッと笑います。

一瞬唖然・・でした。なぜ、この三日前に会ったばかりの、ほとんど見ず知らずの男が、私の鼻水の世話までするのでしょうか？何だかこれって、ちょっと待ってよこれって・・私の頭は少々パニックになりました。ニガボンは私のテイッシュパックから、新たに一枚取り出し、またしても「こより」を作って、自分の耳掃除など始めました。

これって、通常、他人はしないことじゃないの？他人の老廃物の掃除など、誰が好んでするでしょうか？赤の他人に鼻の穴を掃除されたことに、私は一瞬、たまらないバツの悪さを感じました。こんな長年連れ添った夫婦がやるようなこと、なぜこの青年が私にするのでしょうか？、これってもしかしてヤバいんじゃないの・・私はますます頭の中が混乱してきました。

「ユキーナ、君は、だんだん俺と結婚したくなってきただろう？」

ニガボンのこの言葉に、私は真剣に No と答えました。しかもムキになって絶対に、絶対に、そんなことはないからね！と子供みたいに怒鳴ってしまったのです。誰が、好き好んで、この旅先で知り合っただけの男の子、こんな若い子と結婚しようと思うのよ、ふざけちゃいけないわよ。私を誰だと思ってるのよ・・まったく。あせって否定すればするほど、まるで私の方が子供のように見え、私は早々にその場を立ち去りたいような恥ずかしさを感じました。

そう、このときの私には、まさかこの、太く確かなるライン（結婚線）の示す相手が、まさかまさか、自分になろうとは、夢にも思わなかったのでした。

第３項　Beaty　美ということ

大学時代の私のお気に入りの教授は、毎回の授業で、とても興味深い「雑談」をしてくれました。この教授の俳優は？というと、女優なら栗原小巻、男優なら沢田研二だというのです。師、いわく「美しいというのは、本当の美というのは、凄さが備わっていなければなりません。見ている側が、鳥肌がたつような、そんな凄さが備わってないと、美しいとは言えないのです。顔面を拳骨で殴られて目の周りに青あざができたとするでしょう、Oh beauty!!　英語ではそう言うんです。Beauty には凄い、驚愕の意味があるのですね。・・想像を絶するような凄さ、これが備わっていなければ美ではありません・・」

その昔、この「美」というものを、私が最初に感じたのは、ヴァチカンでした。当時の私にとっ

て、最初に訪れた外国は卒業旅行で行ったイタリア、最初に観光した名所はヴァチカン、サンピエトロ大聖堂でした。壁に描かれた宗教画を見ているとこのビューティの意味するところが漠然とわかってきました。限られた見学時間の中で、この壮大な建築物を見て周らなければいけないのです。一つ一つのアートとじっくり対話する時間はありません。しかしながら、この壁画をみていると、何ともいえない醍醐味を見る側が感じました。ヴァチカン、カトリックの総本山、その背後には山のようなクリスチャンを擁している一つの大きな経済主体なのです。

そこに描かれた絵は、単純な色彩の美、デザインの絶妙なバランス、写実の技をとおり越して、一種の「凄さ」を見ている私に与えました。そしてこの、「凄さ」を秘めた絵画は美しかったのです・・これが、芸術にふれて、背筋がぞっとした最初の瞬間でした。大英博物館で購入した絵葉書にこのイタリアアートの美に関する自分のコメントをしたため、大急ぎでこの教授に報告しました。

そして、その卒業旅行から十数年たって、私はイタリアではなく、ブラジルのサルバドールにいました。このニガボンに対してもおなじような「凄さ」を感じたのです。ニガボンと一緒にいて、彼が銀縁の眼鏡をはずすシーンをたびたび見ました。ニガボンの瞳は、私の過去、三十数年の人生の中で、出会った世界中のどの人間よりも、澄んでいて美しかったのです。一瞬背筋がぞくっとして鳥肌が立ちました。ニガボンはずっと私の眼をとらえ、私の瞳をじっとのぞきこんでいます。そして私はその瞳にとらわれたような感じがして、一瞬動けなくなりました。「凄い、そして限りなく美しい・・・」

私はかつてバチカンで見たアートを思い出しました。そして中世の天才がつくったアート（イタリア絵画）と、この私の目の前にある神様が作ったアートをイメージの中で重ねていたのです。そして、この背筋がゾクッとするようなビューティを、自分の傍に置いておきたい、と思うようになったのです。

第５節　　弱「気」な私、そばにあなたがいないから・・・

第１項　確かなぬくもり

私とニガボンは毎日一緒にどこかに出かけました。二月のブラジルは真夏、サルバドールの海岸は連日、観光客でごったがえしています。もう少し静かな海に行こうと、車で1時間ほど離れた田舎町に行きました。語学学校でニガボンを雇っている先生が、プラヤ（海）に行こうと誘ってくれたのです。

心地よく暑い日差し、規則的に打ち付ける波の音、右側にはいつもニガボンがいました。ニガボンの褐色のごつい肩がいつも私の視界に入りました。強い風が吹いてきて、岩場でバランスを崩しそうになると、私の腕をしっかりニガボンが支えてくれます。そんな小さなことでも、自分がこれまで求めていたものは、ああこれだったんだなぁと思いました。こんな身近に求めていたものがあるのだ、その幸せを思うと泣けてきました。

サングラスの奥に流れている私の涙を見て、ニガボンが訪ねました。
「どうして泣くの？」
彼は驚いたような、そして困ったような顔をしています。
「幸せだから・・」
と答える私に、彼はいっそう困惑した表情を浮かべて私に言います。
「僕はずっとここにいるのに、ユキーナのそばにずっといるよ・・泣かないで・・・」
ニガボンは私の手を取ります。私は彼の手を握りました。ニガボンの手のひらは温かく、瞬きをするたびに、涙でにじんだマスカラがサングラスの内側についていくのがわかりました。

二月のブラジル、サルバドールの日差しはとても強いのです。日焼け止めも何もつけずに太陽の下にいたら、30秒で皮膚が赤く焼けてくるくらい、そのくらい強いのです。けれどもそのときの私には、じりじりと照りつける太陽が、じんわりと心に染み込む暖かさにしか思えなかったのです。MBA を卒業してすぐに南米放浪の旅に出ました。それまで過ごしていたミラノとは正反対の気候です。ミラノの冬は冷たいのです。硬い石灰質の大地から、深深と凍るような寒さが足元に伝わってきます。クリスマスを過ごしたブリュッセルも、ほかのヨーロッパの町並みのように石畳の冷たさが、ひと際、足元に染みて堪らなかったのです。暖を求めてアジアを旅しました。けれどもアジアが予想外に寒くて、毎日の雨に心身が冷えました。人が集まる場所には、至るところに冷房が強くきいていて、熱帯の国でも心底冷えてしまったのです。それまでの私は、寒さと冷えに嫌気が差していたのです。

ペルー、アルゼンチンと「暖かさ」を求め、人の心に触れたくて旅を続けてきました。さまざまな人と出会い、親子と兄弟、家族の絆にいろいろな場所で触れることができました。そのたびに、自分に本当に必要なものは何かという答えを、自分は探していたのかもしれない、そう思いました。

そして、その答えが、今身近にあるのです。私がずっと探していたもの、寒さで凍えた体と心が求めていたもの、それが、その海岸で、私の手の届くところにあったのです。映画「ゴースト」のテーマ曲が私の頭に流れていました。I have hungered for your touch…（私はあなたのぬくもりにずっと飢えていた）

これと同じです。私は、愛する人のぬくもりに飢えていたのです。私の手に伝わるこの人のぬくもりは確かで、このぬくもりを感じることができると思うと、自分が生きていることのありがたさがしみじみとわかりました。そして同時に・・・あぁ、自分は今、生きているのだと思いました。

婚活や、仕事のプレッシャーで薬漬けになってから二年、今は自分の中から幸せのエネルギーがあふれているのがわかります。私は今、ちゃんと生きて、こうして人のぬくもりを感じているのです。生きていてよかったと思いました。こうして幸せを実感できて、本当に良かったと思いました。

ほかの何にも代えることのできない尊い事実、私は今、生きている、それを思うと涙が止まらなかったのです。

第2項　頭を冷やして考えた　フェルナンドジ　ノロンンヤ

ホテルのコンサルティングやホテル関連のビジネスをしよう、これも私がマイ・ハッピー・マップに書き込んだ内容でした。そしてリゾート地、観光地のホテルはなるべくチェックしておこう、と思ったのです。ですから、ここブラジルでも、ブラジル国内で一番人気と言われているリゾート地に行こうと思いました。その一番の観光地とは、サルバドールからはるか北にある、大西洋の孤島、フェルナンド・ジ・ノロンニャという島です。

ブラジルは成長が著しいので世界中から注目されています。その国の一番のリゾートに行ってみれば、何が求められて、何が供給されているのか、その国民の生活と成長のレベルを知ることができるのではないか、私はそう考えていました。そしてその観光地にどれだけ外国人がいるか、それをみてみると、世界の国がブラジルにどれだけ注目しているか、その期待度、着目度も知ることができる、こう考えたのです。こうした現地の情報を、自分の体験として得ること、それが必要だと思いました。

フェルナンド・ジ・ノロンニャはブラジル人の誰もが認める究極の楽園のようです。ブラジル人の友達はみんな口をそろえてフェルナンド・ジ・ノロンニャは素晴らしい、そう私にいいました。ここまで言われたのなら、現地を視察するほかない、サルバドールからこの土地への小旅行は私にとって必修課題でした。

フェルナンドになんか行かないで、ずっとここに、サルバドールにいればいい、ビザの期限が切れるまでずっとここにて、俺と一緒にいればいいのに・・・・ニガボンは絶えず私にこう言っていました。「止めるあなた駅に残し・・」ではないのですが、引き止めるニガボンに、一週間し

たら必ず帰ってくる、来週の朝、このバスターミナルに必ず迎えに来て・・と言って、私は長距離バスに乗り込みました。ブラジルの楽園といわれる秘島、フェルナンド・ジ・ノロンニャに向かったのです。

飛行機に2時間のってたどりついたフェルナンド・ジ・ノロンニャは秘島というよりも未開の地、の印象でした。沖縄の那覇というよりも、おきなわの離島のなかで、それなりに大きいもの、石垣島や宮古島といったところでしょうか。高級リゾート・アイランドを想像していた私にとっては、ちょっと拍子抜けでした。この島に滞在してみてわかりましたが、ここが高級リゾートと言われるのは、その安全性のためなのです。犯罪が極端に少ない、その安全性に着目されて、この島が最高級のリゾート地として賞賛されているのです。

アクセスは日に何本かの飛行機か週に一回のクルーズ船だけなのです。犯罪は10年前に起こった銀行強盗一軒だけ、貴重品も何もおきっぱなしにしてサーフィンに行けるのは、この島が隔絶された観光地だからでしょう。ブラジルでは海でもどこでもいつも盗難や強盗に注意しなければいけないのですが、ここは一番安全な島、私は心の緊張を解いて、この島のアクティビティに挑戦しました。海亀と一緒に泳いだり、イルカを見たり、シュノーケルもできます。それらは自然にふれることができて、本当に楽しいのです。けれども私はいつも何か足りない感じがして、心が満ち足りていないような思いをずっと抱いていました。

満天の星をみても、海に沈む夕日を見ても、いつも同じことを思っていました。あぁ、ここにはニガボンがいない。私のニガボンがここにはいない。青い海も波も、のどかな田園も、何も響かない。海をみて落ち着いた感じを味わったのは、ニガボンとでかけた、あのプラヤ（海岸）だけだ・・ここには本当にニガボンがいない・・・

フェルナンドで過ごした数日間、私はずっと、この空虚な、うつろな思いを抱えて、自分のすべきことを考えていました。これは、もうダメだと思いました。離れてこんなに寂しいのなら、終始一緒にいるしかないなと考えました。私は、夜空の星を見上げて、ニガボンに再び会える日を指折り数えて待ちわびていたのです。

寂しかったのはニガボンも同じでした。学校から毎日私にメールを送って、早く帰ってこいと繰り返し言いました。サルバドールに帰ってきたら、（ニガボンの）家に泊まれるように両親に話してみると書かれていました。

どうやら、ニガボンが私を家に泊まらせてもいいか、と両親に聞いたとき、彼の両親は、結婚もしてないのに、そんなことダメだ、と彼に怒ったらしいのです。フェルナンド・ジ・ノロンニャから帰ってきて、ニガボンは私に、こうしたいきさつを伝えました。ニガボンが彼の両親のコメント

を私に語った後、

「（僕の）おとうさん、おかあさんが、何を言っても無駄だよ。だって僕たちは結婚するんだから！」

と口を尖らせて私に言ったのです。

「ちょっと、ちょっと、待って、何を言っているの？あなた私にプロポーズしているの？」

私は驚いて彼にこう聞き返しました。ニガボンは口をとがらせて、ちょっと斜に構え、横を向いたまま、言いました。

「I think so—そうだと思うけど—」

そして私の方を向き直って、私の眼を見て、再度訪ねたのです。

「Are you ready to become my wife? -おれの女房になる覚悟はできているか？-」

私はすぐに Yes と答えました。

結局はこれがプロポーズの言葉になりました。

私たちは、ペウロリーニョに住むアメリカ人のアパートに居候して、私がブラジルを発つまでの１週間あまりをすごしました。一緒に買い物にでかけ、毎日何かしらの料理を作り、サルバドールとペウロリーニョのスピリットであるアシェー(黒人音楽)を毎日、肌で感じて暮らしました。

ドルチェ・ヴィータ（甘い生活）と呼べるほど優雅な日々ではありませんでした。けれども、私にとってはニガボン無しの生活に比べたら、はるかにまともな、満ち足りた心地よい生活だったのです。

第３項　　「つがい」、相手がいないと我が気が弱る

ニガボンと離れている時、その寂しさを通じて、私が学んだことがあります。それは動物が、なぜツガイなるのか、ということです。動物が相手とペアになり、ずっと一緒にいようと思うのは相手の存在がないと自分の気が回らない、つまり自分が元気でいられない、と自覚するから、ではないでしょうか。

人も動物も、成人すれば、独立して生きていかなければいけません。けれども、ある特定の、別の生命体の存在がなければ、自分は息すらできない、そんなことが起こるのです。そんなことがあるの？と皆さん半身半疑かもしれません。ですが、私は毎日、自然の気の働きを意識して生活しているのです。自分の気の流れ、気のめぐり、これをいつも注意して生きているのです。自分の気がどうしてこんなに弱くなるのだろう、そう思って理由を考えてみました。サルバドールにいた時よりも、ここフェルナンド・ジ・ノロンニャの方が、ずっと自然にあふれているのです。空気も水もはるかに奇麗で浄化されているのです。食べ物も質がちがいます。地元の島の

汚染されていない土から作った農作物は、サルバドールで食べるものよりもはるかに、おいしく、自然の味に溢れているはずです。ここで生活していたら、私はサルバドールにいるよりもずっと元気になっていいはずなのです。

それなのに、私の体は、日に日に弱っていっているような気がしました。おなかの底からグングンとエネルギーが湧いてくる、そうなってもいいはずなのに、むしろ逆でした。何をやるにもちからが入らず、シューっとしぼんでいく風船のようにエネルギーが空気中に漏れている、そんな感じがしました。きれいな空気のはずなのに、何となく息苦しいのです。しっかり呼吸ができないのです。今になって考えてみると、この時の私の状況は明らかに、肺からの毒だし症状です。肺の毒は「寂しさ」という感情と密接に関連しています。ニガボンがいない、その寂しさが私の呼吸を浅くして、肺の毒として出ているのです。相手がいないと、呼吸もできない、それは、むしろ自然の摂理なのだなぁと、今には良く理解できるのです。

聖書には、「人は長じると父母を離れ、妻を娶る」とかかれています。これはいわゆる道徳の規範として書いているのではないと思います。いい年になったら、結婚して世帯をもちなさい、なぜなら、それが常識だから、と言っている訳ではないと思います。常識だから結婚しなさい、これを奨励している言葉ではないのです。常識だからではなくて、ある時期になると生きるという営み自体に、パートナーが必要になってくるのです。だから父母を離れて、世帯をもつのです。私が感じた、いるべき相手がいない寂しさは、父母では補えないのです。だから一緒にいて、相手の気（エネルギー）に自分の気を使い（気遣い）、お互いが健康でイケている状態であるように、いたわりあうのです。

社会の常識だから、世間がみんなそうしているから、だから世帯を持つのではなくて、人間はもともと「つがい」になるように作られているのです。相手を必要とするように、そうなるようにできているのです。これが、生き物が、雌雄存在することの理由なのだと思うのです。

もちろん何かの理由があって、「つがい」でいられないこともあるでしょう。もちろん、パートナーがいてもいなくても、仕事の能力とは全く関係ないものです。「つがい」の相手を持っていないから、社会人としては不完全、こんな考えを押しつけられたら、それは差別です。

けれども一緒に生活をする自分とは別の個体がいる、それをありがたいと思う、これも生まれてきた喜びのひとつであると思うのです。

私の場合は、それに気づくのに約30年以上かかりました。ただそれだけなのです。

これは、私が考えついた、人はどうして結婚するのか？という問いかけへの答えです。けれども人それぞれ、何故結婚することが必要なのか、その理由は違うと思います。そして自分は

本当に結婚しなければいけないのか、その答えももちろん違ってくるでしょう。結婚することの意味、どうして結婚しなければいけないのか、それはまず皆さん一人一人が考えてみる内容だと思います。

婚活で頑張る前に、本当に結婚が必要なのか、必要だとしたら、なぜ必要なのかそれを今一度考えてみましょう。理想の相手を最短で発見するには、これが近道なのかもしれません。